

大分県方言にみる主格助詞「イ」の研究

切石文士

A Study of the Postposition “i” (Nominative Case) in the Ōita Dialect

BUNSHI KIRIISHI

Summary

In the basin of the Ohno river in Oita, a nominative postposition “i” is in general use as in ‘Ame *i* furi dēta’, which means “It has started raining”. Nowhere can this postposition be observed except in and around Ohno county, including some parts of Naoiri, Minami-Amabe, and Kita-Amabe counties. This postposition is equivalent to “ga”. Therefore, ‘Kisya *i* kiyoru’ is the same as ‘Kisya *ga* kiyoru’, which means “The train is coming”. Naturally this postposition, which is used only in the limited areas and is gradually giving way to “ga”, totally differs from the locative and dative postposition “i” as in ‘Beppi *i* iku’, meaning “go to Beppu” or ‘Soki *i* aru’, meaning “It is just there”.

As for the usage, not every noun precedes this postposition. For instance, one-syllabled nouns do not usually precede the nominative “i”, nor do the nouns with the sound [i] at the end. Moreover, nouns ending with the sound [n] NEVER precede it. This is to say that this nominative “i” is a postposition with considerable restrictions on its usage.

Furthermore, *Manyousyu*, *Senmyou* and other old literary works show some examples of another postposition “i”, which was in use in the old Japanese and had almost the same function as the “i” in question. Examples are:

- (1) Kena no wakugo *i* fue fuki noboru (*Nihonsyoki* 17, 98)
(The young lord of Kena is going up the river, whistling.)
- (2) Ie naru imo *i* ibukashimi semu (*Manyousyu* 12 • 3161)
(My wife back at home may feel unbearably painful.)

However, the old “i” has not generally been defined as a nominative postposition.

At any rate, the fact is worthy of attention that the nominative “i” is still in common use in the limited areas and is not to be found anywhere else. Therefore, the intention of this thesis is to shed light on the current usage of the nominative “i”, and to research its relationship with the above-mentioned postposition “i” in the old Japanese.

I. はじめに

大分県をほぼ西から東に貫流する大野川流域周辺には、「アメイフリデータ。」(雨が降り出した。)の「アメイ」の「イ」のような助詞がある。(以下これを「イ」助詞と呼ぶ。)

これは大野川をはさむ大野郡を中心に、同郡をとりまく直入・南海部・北海部・大分の各郡の一部町村に使用され、別府・杵築・国東・宇佐・中津等の県北地区・玖珠・日田の久大地区には全くみられない、大分県の南部地区にのみみられる助詞である。
県下どこにでもみられる「ソキイアル。」(そこ

にある。「ベッピイク。」(別府へゆく。)のように使用される位格、与格の「に」「へ」助詞とは異なるものであって「イ」助詞は共通語の「ガ」に当る主格を示す助詞である。

一方、上代の文献及び中古の訓点資料に、この「イ」助詞と同じ働きをしている、いわゆる古助詞「い」がみられる。

○枚方^{ひらかた}竹^{のぼ}吹き上る近江^{けな}のや毛野^{わくご}の若子^い笛吹き上る(日本紀17・98)

○在千瀉^{ありちがた}あり慰めて行かめども家なる妹^いいふかしみせむ(万葉12・3161)

「毛野の若殿^がが、笛を吹きながら川をさかのぼっている。」「家にいる妻^ががづらがることであろう。」と主格に使われている例である。がこれについては、用例が多くないのと、他の用例からみて諸説があり、現在まで主格助詞とは限定されていないようである。

だがいづれにしても「イ」助詞が現に大分県の南半分地区に主格助詞として使用されており、また全国的にみて大分県以外にはこの助詞が確認されていないという事実から、第一次調査1952年(昭和27年)、第二次調査・1980年(昭和55年)、第三次調査・1987年(昭和62年)と年月を置いてみてきた状況・実態をまとめ、「イ」助詞と古代助詞「い」との関係をも究めていこうとするものである。

II. 研究史——「イ」助詞の部——

大分県方言全般についての研究の跡は、三ヶ尻浩の『大分県方言の研究』(昭和12年)、松田正義の「研究史・研究文献」(昭和55年『大分百科事典』OBS大分放送編)、糸井寛一の「大分県の方言」(昭和58年『九州地方の方言』飯豊毅一他・p.237)、近くは二階堂整(九大院生)の「大分県方言関係文献目録」(昭和60年)等に詳しい。

が、大分県方言「イ」助詞についての先行研究は、前述の三ヶ尻浩に始まるかと思う。次に主な「イ」助詞研究資料数編を年代順に列記する。

1. 三ヶ尻浩『大分県方言の研究』(昭和12年・朋文堂)

大分県方言を総合的に解明、古代から昭和初期にいたる歴史的考察をはじめ、語彙・音韻・語法等217ページにわたって述べた、示唆に富む整った概説書である。

「イ」助詞については、「語法上の特色」(p.116)の中に異色助詞として次のように述べている。全文をあげる。

主格を示すイ。例 家イある(家がある。)ナ
エイゆる(地震がする。)人イ見ゆる(人が見える。)などで明らかやうに、どんな体言の下にも附いて「が」と同様、主語を導き出す。之は、朝鮮語の^이 (音イ、即i)が亦それに当る。又

○毛野若子^い伊笛吹き上る。(日本書紀、継体紀24年10月)

○家なる妹^い伊いぶかしみせむ。(万葉, 3161, 卷13)

などのイも同意であることは、説明を要しないであろう。

このイは大分・大野・北海道諸郡の農村に盛んに用ひられたものであるが、漸次行はれなくなって行くやうである。

これは右に述べたやうな古いいはれのものでなく、主格を示す「が」の音韻変化を遂げた一の形であるかとも考へるが、意味に於いては、古い^い伊と少しも異なる所はない。

著者は「実地に踏査し、文書で照会をかさねるなどのことを為し得なかつた」(p.5)といっているが、現在の「イ」助詞の実態からみて、実に的確な考察を加えている。

2. 奥里将建『古代語新論』(昭和18年)

六. 助詞の項(p.220)に主格を現す古代格助詞に「イ」が存していたとして、いくつかあげた用例の中で特に

筑波嶺のをてもこのもに守部^いすゑ母^い已守れども魂ぞ逢ひにける(巻14・3393)

の東歌を指示、大分県方言の「風イ吹く」(風が吹く)・「学校イある」(学校がある)等のイ助詞とこの万葉集の歌に現れている已(イ)助詞とが1千年を相隔てて東西相對峙していると「イ」助詞の残存を説いている。

3. 佐保(改姓切石)文士「大分県方言の研究」
—〈大野郡を中心とする「イ」助詞について〉
—(昭和28年,大分大学卒業論文,糸井寛一指導)

古助詞「い」との関係に興味をもち,昭和27年,大分県下全域にわたり,86町村の196地点(内,大野郡22町村,110地区)につき,通信及び臨地調査を実施,特に「イ」助詞の使用が日常化している調査者の出生地を中心に「イ」助詞の実態・機能を探る。三ヶ尻説を論証敷衍した形の論文である。が三ヶ尻の「イ助詞はどんな体言の下にも附いて『が』と同様,主語を導き出す」という点に,着目。音韻上の制約を究明,なお古助詞「い」との関係を探る手掛りを得ようとした論考である。

4. 糸井寛一「イ助詞臆説」(昭和29年『チョルケン』第1輯・大分大学学芸部方言研究同好会)

大野郡一帯における主格を示す「イ」助詞について佐保(改姓切石)が目下鋭意研究中である。その研究を進める上で何か足しになればと,仮説をたて,豊富な用例をもって解説論考していく。特に佐保が調査の結果,明らかにした主格「イ」助詞の性格中,最も注意をひく,

- ①「イ」は「ン」で終る名詞には附かない。
- ②「イ」は,イ列音で終る名詞に附くことがごく稀である。
- ③「イ」は1音節の名詞に附くことが少ない。の三つについて,これは「イ」助詞が名詞に結合する場合の音韻上の制約であるとして,

〔ノ>ン>イ〕という仮説をたて,この三つを論理的に究明していく,貴重な論文である。

なお「イ」助詞は用言(連体形)に附かない,また「は」「し」等の助詞と重ならないことなどから,その本体(基本語)形或いは前身が「ノ」であり,古代「い」助詞とはちがうことを強調している。

5. 切石文士「イ助詞の分布—鶴崎地区—」
(昭和29年『チョルケン』第1輯・大分大学学芸部方言研究同好会)

大分県下にみられる「イ」助詞の分布状況はほぼわかった(第一次調査)が,よりはっきりしたものという意味から大野川下流の鶴崎地区の調査を行った。

調査は高校生90名に依頼して,地区民を対象に質問調査(表2)を実施,その結果主格の「ガ」のすわる位置に「イ」助詞を使用した者,90名(男49・女41)中12名(男11・女1)の13.3パーセントであった。全員農業で45~84歳,その土地の者である。その調査結果をまとめてみると,

- ①「イ」助詞は海岸部に,より多く残存している。
- ②大野川以南にのみ使用されている。
- ③「イ」助詞を音韻上からみると,
ア.「イ」は「ン」音には全くつづかない。
イ.「イ」は「i」「u」音にはほとんどの場合つづかないが,たまにつづくことがある。
ウ.「イ」は「a・e・o」の音にはよく附く。

④中年層以下には「イ」助詞の使用がみられない。

といった集約を得ている。

なお,なぜ大野川周辺及び大野川以南に限られて残存しているのか。

また,山田孝雄は,古助詞「い」は,係助詞「は」「し」を下に伴へること多し。(『奈良朝文法史』p.423)といっているが,当「イ」助詞にはその例はみあたらない。主格を示すという点では,古助詞「い」も大分方言の「イ」助詞も同じな面があるのに全く関係はないのかななどの問題を提起している。

6. 東条操編『方言学』(昭和29年・吉川弘文館) 豊日方言について説明(p.68)その中で,大分県方言に言及,「音韻・文法に関する文献に乏しく大分師範学校の『大分県方言考』,三ヶ尻浩の『大分県方言の研究』が参考となる程度である」といい,「大分県方言で珍しいものでは,地震イ

ゆる、人イ見ゆるのイで、これは大分・大野・北海部諸郡に使われていた」と簡単にふれている。

7. 糸井寛一「主格のイ助詞について」(昭和33年『大分県方言の旅・第3巻』NHK大分放送局)(p.253)

現在までの「イ」助詞研究の決定版ともいえる論考である。「イ」助詞の使用地区を全県的にながめ、「イ」助詞の特質を音韻上の制約・機能からとらえていく。位格・与格のイとの比較から、上代の典籍や平安時代の訓点資料などにみる古助詞「伊(い)」との関係に言及、問題を提起、卓見を簡潔にまとめた論文である。

8. 松田正義『方言生活の実態』(昭和35年・明治書院)

昭和29年から6年間、NHK大分放送局の協力により大分県内外32地点(67市町村中)を踏査生きた方言を生のまま録音、分析、考察を加えた調査方法の新形態を示した研究書である。

「イ」助詞については、随所(p.40~45, 133~135, 207~209, その他)にふれ、ことに南海部郡・大野郡の各一部地域の「イ」助詞使用状況に限っては格別に詳述、豊富な用例をあげている。

9. 切石文士「大分県方言『イ』助詞に関する一考察」(昭和57年、『国語大分』26号)

昭和26~27年にかけての第一次調査(昭和28年卒論)以後30年を経過、その間「イ」助詞の使用状況がどう変化しているか、「漸次行はれなくなって行く」(三ヶ尻浩)といわれてきた「イ」助詞を更に追跡、第二次調査としてまとめた調査報告である。

なお今回の二次調査では、古助詞「い」と「イ」助詞との関係を見出す方法はないかと、これまで古助詞「い」について究明してきた先覚の論考を列挙、考察の一助としている。

10. 上村孝二「九州方言の概説」・『九州地方の方言』(飯豊毅一他編, 昭和58年・国書刊行会) 1行ではあるが「大分県にはノはなくガの方であ

るが、県北にはグがあり、県南にはイがある」と九州方言の概説(p.22)の中で、イ助詞グ助詞にふれている。

11. ○高野滋子「大分県南海部郡方言における『イ』助詞について」(昭和61年)

○萩原紀子「大分県大野郡方言におけるイ助詞」(昭和61年)

この両論文は、大分県方言研究会(会長・松田正義)第7回大会で発表したもので、前者の「新旧別に見た『イ』助詞の接続」、後者の「対象格となる体言に接続する場合」と両者こまめな視点から「イ」助詞の全体像を把握しようとした調査報告である。

12. 学問的研究ではないが、大分県方言語彙の収集の中に「イ」助詞を取り上げているものが、市町村誌刊行ブーム等につれて目立ってきている。

昭和40年、大野郡野津町誌

昭和57年、大分県方言集成補遺(渡部之夫)

昭和58年、全国方言辞典・(平山輝男編・「大分方言」糸井寛一)

昭和62年、大野郡三重町誌

これらの他に「イ」助詞について1~2行程度ふれたものがいくつかあるが割愛する。

「イ」助詞は上記のように昭和50年代に入って、一般的に関心が高まってきたといえようか。

III. 調査概要及び考察

1. 第一次調査 1952年(昭和27年)

(1) 通信及び臨地質問調査

方言調査には多くの人の協力がなくては目的の達成が難しい。大分県方言の研究という点、研究範囲が全県下にまたがるために、いつも臨地調査ばかりというわけにもいかず、どうしても通信調査に頼らざるを得なくなる。

○雨が降るので困る。

○道ばたに犬が居るがこわくはない。

○用事があるからあそこへ行く前に来なさい。

この文は、特に意図して選んだというものはなかったが、その地域の方言に書き改めてもらったところ、主格助詞「が」に相当する助詞に「イ」「グ」のあることがわかった。

被調査者は教員または地区民で、できるだけ20代とし、男女何れでもよいとした。

この調査によって「イ」「グ」「ガ」の助詞が使われていることがわかった。〔表1〕

全県的にみると、「雨が降る」を「アメイフル」「アメグフル」「アメガフル」と三通りの形で使用しており、その範囲もほぼ県を南北に分ち、北が「グ」助詞、南が「イ」助詞となっている。が総体的には共通語の「ガ」助詞が占めている状況にある。

第2回目の調査では、前回と調査地点が重なるとして重ならないようにし、より詳細なデータを得るために調査項目の配列及び、質問調査の文例に注意することにした。

① 「イ」助詞使用のまったなかになに育ってきた調査者には、主格助詞の「ガ」が「イ」に使われるには、その前の母音に関係してくるように思われた。

② 被調査者を、前回は教員又は地区民の20代としたが今回は調査が手取り早くでき、なお若年層の方言意識も知りたかった関係から中学生又は教員1名あてとした。

③ 臨地調査に備え「イ」助詞の全体像を早く把握するために、前回と同じく通信調査とした。

調査項目の内容については、意図的に母音及び音節を考慮、その配置に留意した。〔表2〕

第1回の予備調査の結果、判明した主格助詞「イ」「グ」「ガ」の使用範囲をより明確にするために、実施したのが、第2回調査である。この両調査は、市及び大野郡を除いている。市部は、人口構成の性格から方言調査にはむかないし、大野郡は別途に調査の要があると考えたからである。

第2回調査の結果をある程度整理して示したのが、〔表3〕(その1・2)である。(分析は後述)

表1 方言調査 (主格助詞)

(昭和27年5月調査)

郡	町村(性別・年齢)	方言 (主格助詞)		雨が		犬が		用事が	
		ア メ		イ ヌ		ヨージ			
		ガ	イグ	ガ	イグ	ガ	イグ		
下毛郡	1 深秣村(男20)		△○			○			△
	2 山口村(男25)	○	△○						△
	3 山国村(男27)	○		○		○			
	4 今津町(女22)	○		○		○			
	5 本耶馬溪村(男20)	○		○		○			
東国東郡	6 富来町(女20)	○		○		○			
	7 姫島村(男22)	○		○		○			
	8 旭日村(男25)	○		○		○			
宇佐郡	9 国東町(女24)	○		○		○			
日田郡	10 深見村(男30)	○		○		○			
	11 東有田村(男24)	○		○		○			
	12 中津江村(女25)	○		○		○			
	13 夜明村(男21)	○		○		○			
大分郡	14 五馬村(女50)(無職)	○		○		○			
	15 吉野村(女40)	○		○		○			
	16 由布院町(男25)	○		○		○			
	17 野津原村(女26)	○		○		○			
	18 竹中村(男27)	○		○		○			
	19 阿南村(女24)	○		○		○			
南海部郡	20 中野村(男24)		◎			◎		○	
	21 保戸島(男31)			△○		○		○	
	22 木立村(男23)	○		○		○		○	
	23 上浦町(女24)	○		○		○		○	
	24 東中浦村(男26)	○		○		○		○	
	25 小野市村(男26)		◎			○		○	
	26 蒲江町(男25)	○		○		○		○	
直入郡	27 玉来町(男22)	○		○		○		○	
	28 荻村(男25)		◎	△○		△○		△	△
大野郡	29 西大野村(男24)		◎			◎		○	
	30 上井田村(男26)		◎			◎		○	
	31 緒方町(男27)		◎			◎		○	
	32 合川村(男25)		◎			◎		○	
	33 野津町(男26)		◎			◎		○	
	34 川登村(女25)		◎			◎		○	

表2 方言調査表

昭和27年 月 日

郡	町立	中学校	年	男・女	歳
現住所 (大字) 氏名 ()					
次のことばをあなたの使っている方言に書きなおして下さい。					
1	車がない。	13	様がおかしい。		
2	朝がきた。	14	寄附が少ない。		
3	弓の矢がない。	15	湯がわいた。		
4	片仮名のアが消えた。	16	鶉(う)がもぐった。		
5	右手がつよい。	17	海がみえる。		
6	梅がすきだ。	18	柿がなった。		
7	手がいたい。	19	火がきえた。		
8	絵が多い。	20	胃がつよい。		
9	桃がなった。	21	きんかんがなった。		
10	色がうすい。	22	辞典がない。		
11	野が広い。	23	土管がある。		
12	下駄の緒が切れた。	24	盆がきた。		

第2回調査は第1回調査の補足的調査であったが、この調査で「イ」「グ」という特殊な方言助詞の使用範囲及び、同居地区がみられたのは有意義であった。

「グ」助詞についての研究は後日にゆずるとして、県南地区にみられる「イ」助詞の調査をいっそうすすめるために、第2回全県調査と併行して「イ」助詞の本場と予想される大野郡を中心に大野郡周辺の臨地調査をも実施した。

- ① 調査内容は、〔表2〕の方言調査表による。
- ② 被調査者は町村中学生対象、8～10名。
- ③ 校区内の各地区の出身生徒を対象とし一地区にかたよらないように注意。

④ 学校において、中学生を直に借り調査する。

大野郡内の調査地点及び被調査者の内訳は〔表4〕・〔図1〕のとおりで、5町17村の110地区、約200名を対象に調査ができた。その調査結果を整理して示したのが〔表5〕である。(分析は後述)

この大野郡内の調査地点及びその周辺地区の臨地調査(後述)を加えて、大分県下全域にわたる調査(86ヵ町村・196地点)結果が得られ、「イ」助詞の使用地域の全容が明確になった。県下全域にわたる調査地点(第1回・第2回の調査)をまとめると〔表6〕・〔図2〕のとおりである。この調査結果の分析は後述する。

以上を整理して、大分県下にみられる「イ」「グ」「ガ」助詞(主格)の分布状況を図示すれば〔図3・4〕のとおりになる。

(2) 臨地調査

真の方言の姿をとということになれば「イ」助詞の実態を日常の言語活動全体の中で把握し、聴きとっていく必要がある。「聴覚は録音器の足元にも及ばない。シンタクス(構文論)の研究には、録音されたものの文字化が最もためになる」(東条操編『日本方言学』p.390・柴田武「方言調査法」)というわけで、文明の利器テープレコーダーを片手に調査者の出生地大野郡合川村(現・清川村)大字左右知字轟を調査地点と定め泊り込みで採録していった。

- A. 67歳男 大野郡合川村生れ } 夫婦(隠居)
- B. 58歳女 大野郡緒方村生れ }
- C. 72歳女 大野郡合川村生れ } 隣人(隠居)
- D. 4歳男 大野郡合川村生れ } A・Bの孫(同居)
- E. 26歳男 大野郡合川村生れ } 調査者

この老夫婦を中心にお茶のみ話(四方山話)をしてもらったのを傍受、採録していった。

「イ」助詞の使用は、その前の語の最終母音に関係ある(前述)とみて、約2時間にわたった会話を、便宜上、例えば〔母音ア+イ〕・〔母音オ+イ〕とかの含まれているものに分類、2～3

表3 (その1) 他郡町村別主格助詞使用状況 (中学生・教員対象) ※空欄はすべてガ助詞使用

母音 + 助詞	調査番号	郡町村	北海部郡				南海部郡						大分郡			西国東郡							
			南津留	北津留	佐志生	大在	明治	因尾	中野	上野	切畑	小野市	重岡	直見	今市	竹中	吉野	川添	三浦	上真玉	朝田	田染	
			男15	男14	女14	男15	女34	男27	男24	男26	男27	男23	男26	男26	男40	男26	女40	男36	男25	男15	女15	女14	
a + i	1	クルマガ			イ	イ	イ	イ	イ		イ		イガ										
	2	アサガ		イ	イ			イ	イ		イ	イガ	イ	イ	ガイ							グ	
	3	ヤガ																				グ	
	4	アガ																				グ	
e + i	5	ミギテガ			イ					イガ	イ		イガ									ガ	グ
	6	ウメガ		イ	イ			イ	イ	イ	イ		イ		イ		イ					グ	
	7	テガ																				グ	
	8	エガ										イ										グ	
o + i	9	モモガ	イ	イ	イ	イ		イ	イガ	イ	イガ	イ	イ	ガイ		イ						グ	
	10	イロガ	イ	イ	イ		イ	イ	イ	イ		イ	イ	イ								ガ	グ
	11	ノガ									ガイ											グ	
	12	オガ							ガイ	ガイ			イ									グ	
u + i	13	ヨウスガ	イ	イ			イ	イ		イ												グ	
	14	キフガ					イ	イガ			イ	イガ		ガイ								グ	
	15	ユガ																					
	16	ウガ									ガイ											グ	
i + i	17	ウミガ									イ		イ									グ	
	18	カキガ									ガイ											グ	
	19	ヒガ																				グ	
	20	イガ																				グ	
n + i	21	キンカンガ																					
	22	ジテング																				グ	
	23	ドカンガ																				グ	
	24	ボンガ																				グ	

(昭和27年7月調査)

例あてあげて示すことにする。調査者の意図する場面のみぬき出したので、座談の流れとは無縁に切れ切れた会話文となっている。(～線は主格助詞「ガ」を示す。)

{ a + i }

- ① オチャオ タベナー モースグ ママイ
 ジェグルキー ソレマジー。
 (お茶をお上りなさい。まもなく御飯が出来

ますから、それまでにさあ…) (B→A)

- ② コメン ケンサイ キタカフ。
 (米の検査員が検査に来たかね) (A→C)

- ③ チョーカイ ジェイキンジェンカケンチュ
 ート ミンナイ ダスンジャガナー。
 (超過米が、税金でもかけないということになると、みんなが供出するのだがなあ。)(C
 →A)

表3 (その2) 他郡町村別主格助詞使用状況 (中学生・教員対象)

※空欄はすべてガ助詞使用

母音+イ 撥音	調査番号	郡 町村 被調査校(学年)	直入郡																				
			日田郡		玖珠郡		下毛郡		豊後郡		速見郡		直入郡										
			小野	前津江	夜明	東飯田	飯田	深耶馬溪	上国崎	大神	山浦	姫岳	城原	松本	長湯	宮城	下竹田	管生	都野	白丹	萩	宮砥	入田
男26	男25	女23	男27	男24	男15	男15	男23	男26	男14	男15	女15	男15	女16	男23	男25	男26	女21	男24	男25	男29			
a+i	1	クルマガ												イ					ガ	イ	ガ	イ	イ
	2	アサガ																	イ	ガ	イ	ガ	イ
	3	ヤガ																		ガ	ガ		
	4	アガ																					
e+i	5	ミギテガ																			グ		
	6	ウメガ													イ					イ	イ	ガ	イ
	7	テガ																					
	8	エガ																					
o+i	9	モモガ																	イ		グ	イ	イ
	10	イロガ																		グ		イ	イ
	11	ノガ																			イ	イ	イ
	12	オガ																				イ	イ
u+i	13	ヨウスガ																		イ	イ	イ	
	14	キフガ																		イ	イ	イ	イ
	15	ユガ																					イ
	16	ウガ																					イ
i+i	17	ウミガ																					
	18	カキガ																		イ		イ	イ
	19	ヒガ																					
	20	イガ																					
n+i	21	キンカンガ																					
	22	ジテング																					
	23	ドカンガ																					イ
	24	ボンガ																					イ

(昭和27年7月調査)

〔e+i〕

④カジエイ タツタカノー カジェイタター
モミガヒル。

(風が吹き出したかね。風が吹けば、靱が乾く。)(Aひとり言)

⑤パネーイ ヨエーモンジャキー フハツン
トキガアル。

(バネが弱いものだから不発の時がある。)
(猟銃の調子のよくない話)(A-E)

⑥ダレイ ソデーヌイモンニー ジシנגガ
アルモンナ。

(誰がそんなに縫ものに自信があるもので
すか。)(B→C)

〔o+i〕

⑦オマイドイ ツクルナンカユート エチエシ

表4 大野郡内調査地点(中学生対象)

(昭和27年7月調査)

番	町 村	地区調査地点 () は被調査者 2人以上
1	野津町	①老松(2), ②都原, ③宮原, ④野津市(2), ⑤原
2	田野村	⑥八里合(2), ⑦副良木(2), ⑧亀甲, ⑨王子, ⑩山頭
3	川登村	⑪落合(3), ⑫清水原(3), ⑬垣河内, ⑭岩尾
4	南野津村	⑮前河内, ⑯秋山, ⑰吉田(2), ⑱西畑(2), ⑲東谷(2)
5	戸上村	⑳千塚(2), ㉑西寒田, ㉒久原(2), ㉓藤小野, ㉔烏嶽, ㉕柚ノ木
6	犬飼町	㉖下津尾(4), ㉗町(2), ㉘田原(2)
7	長谷村	㉙柴北(3), ㉚黒松(3), ㉛の2 長畑(2)
8	千歳村	㉜大迫, ㉝長峰(4), ㉞原田(2), ㉟前田
9	大野町	㊱安藤(3), ㊲中土師(2), ㊳沢田, ㊴十勝(2), ㊵河面, ㊶岡倉 ㊷田中(3), ㊸桑原(2), ㊹戸塚, ㊺長迫(2), ㊻木倉木(2), ㊼矢田(2)
10	菅尾村	㊽宮野(2), ㊾菅生(2), ㊿アサセ(2), ①井迫(2)
11	百枝村	②上田原(2), ③西泉(2), ④向野(2), ⑤川辺(2)
12	三重町	⑥芦刈(2), ⑦赤嶺(4), ⑧秋葉, ⑨内田(2), ⑩松尾, ⑪鷺谷(2)
13	新田村	⑫玉田(3), ⑬久田(3), ⑭本城, ⑮小田
14	白山村	⑯伏野(2), ⑰奥畑(2), ⑱中野, ⑲久部, ⑳大白谷(2)
15	合川村	㉑井崎, ㉒宇田枝(2), ㉓馬背畑, ㉔六種(2), ㉕平石, ㉖左右知, ㉗轟
16	牧口村	㉘雨堤(2), ㉙砂田(2), ㉚三玉(2), ㉛天神(2)
17	緒方町	㉜野尻(2), ㉝井上, ㉞知田, ㉟馬場, ㊱下自在, ㊲軸丸, ㊳原尻
18	長谷川村	㊴小原(3), ㊵栗生(2), ㊶上畑(2), ㊷帯迫
19	上緒方村	㊸上年野(2), ㊹冬原, ㊺上冬原, ㊻木野, ㊼徳田(2), ㊽中野
20	小富士村	㊾草深野, ㊿辻(2), ㉑小宛(2), ㉒寺原, ㉓片ヶ瀬(2)
21	上井田村	㉔越生(4), ㉕朝地(4)
22	西大野村	㉖温見, ㉗小泉, ㉘島田, ㉙神堤, ㉚栗林(2), ㉛綿田(2)

被調査者の内訳(中学生・性別)

町 村	人 数		町 村	人 数		町 村	人 数	
	男	女		男	女		男	女
野津町	4	3	大野町	10	12	緒方町	2	6
田野村	3	4	菅尾村	4	4	長谷川村	4	5
川登村	4	4	百枝村	4	4	上緒方村	4	4
南野津村	2	6	三重町	6	6	小富士村	4	4
戸上村	4	4	新田村	4	4	上井田村	4	4
犬飼町	4	4	白山村	4	4	西大野村	4	4
長谷村	4	4	合川村	4	5	計	91	103
千歳村	4	4	牧口村	4	4		194	

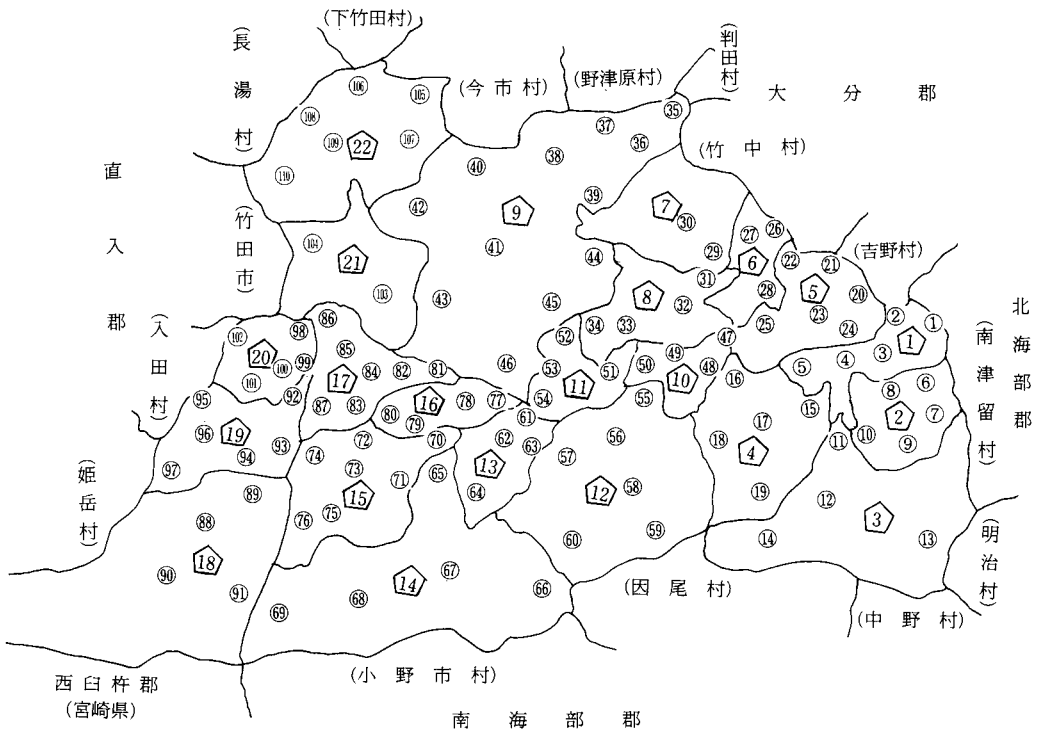


図1 大野郡内調査地点

ャペランワイ。

(お前たちが、記入するなんていうと、かえってしゃべらないよ。)(A→E)

⑧アンマレムリュウエイワレンチューチ ソン
 チョーイ イヨッタ。

(あまり無理を言われないうって、村長が
 言っていた。)(A→C)

⑨リョーイ クータナー モチンアンガネ
 ー。ガワンジョーノコッチョルドー。

(良治が、たべたな、餅のあんこがない。皮
 ばかりが残っているぞ。)(A→D) (子供を
 なかった。)

⑩ウチカタンノイ クイスゲチー オイシャ
 イキジャー。

(私方の〈子供〉が たべすぎて、お医者い
 きですよ。)

[u+i]

⑪ベツパイ チカカラナー ツレチィチャル
 ンジャガ。

(別府が近かければねえ、連れていってあげ
 るのですが、遠いからだめですね。)(A→C)

⑫トーフイ ジェケタナエー ユージェクタ
 ナ。

(豆腐が、できましたかね、よくできた
 か。)(B→C)

⑬オマエカタンノイ ネットモータラ、トラ
 ックイキチー ツンジータンジャー。

(あなたの家の〈供出米〉が無いと思ったら、
 トラックがきて、すでに積んでいったので
 すね。)(C→A)

[i+i]

表5 大野郡町村別「イ」助詞使用状況(中学生対象)

*数字は使用者数を示す。空欄は男・女ともに0を示す。

母音+イ 撥音	町村 調査人員(男・女) 番号	川 登	田 野	野 津 町	戸 上	南 野 津	菅 尾	新 田	三 重 町	百 枝	白 山	合 川	牧 口	長 谷 川	上 緒 方	小 富士	緒 方 町	上 井 田	西 大 野	長 谷	犬 飼 町	千 歳	大野町		計	
																							北 部	中 部		(男・女)
a + i	1	クルマイ	3・4	3・3	4・3	4・4	2・6	4・4	6・6	4・4	4・4	4・5	4・4	4・5	4・4	4・4	4・4	4・4	4・4	4・4	4・4	4・4	4・4	6・8	194 (91・103)	76
	2	アサイ	4・3	4・4	4・3	4・4	2・6	4・4	5・5	3・3	3・4	4・5	3・3	3・4	4・4	4・4	4・4	4・4	3・4	4・4	4・4	4・2	4・4	5・7	168 (79・89)	87
	3	ヤイ	1・1	1・0				3・3	1・0	1・0	0・1	2・1	0・3	1・0		2・0	1・3	0・1	0・2	0・3	1・1	1・0	0・2	0・1	37 (15・22)	19
	4	アイ		0・1	1・0			2・2		0・1	0・1	2・1	0・3	1・1	0・1	1・0	1・0		0・1	0・2	1・0		1・0	0・1	25 (10・15)	13
e + i	5	ミギテイ	2・1	1・2	1・0	4・4	1・2	4・1	1・1	2・3	3・3	3・2	2・3	2・2	4・4	1・4	1・6	1・1	2・3	2・4		3・1	3・2	4・4	105 (49・56)	54
	6	ウマイ	2・2	2・4	3・2	4・1	1・4	4・2	1・3	3・3	3・3	4・4	3・4	3・3	4・4	3・4	1・6	2・4	2・3	3・4	1・0	4・2	4・4	6・8	142 (66・76)	73
	7	テイ									1・1	0・1			1・0	1・0			0・1						6 (3・3)	3
	8	エイ				0・1		1・0				1・1	0・1		1・1	1・0			1・2	0・1		0・1			14 (5・9)	7
o + i	9	モモイ	2・3	2・4	3・3	4・4	2・6	4・2	4・3	4・4	3・4	4・5	3・4	2・4	4・4	2・3	1・6	4・2	2・3	3・4	1・0	4・1	4・3	5・6	150 (69・81)	77
	10	イロイ	4・3	2・4	3・3	4・2	1・4	4・2	3・4	4・4	4・3	3・4	3・4	3・2	4・4	2・3	1・6	3・3	3・4	4・4	1・0	4・2	4・3	6・8	153 (74・79)	78
	11	ノイ	0・1	0・1	2・0			1・1	1・1	1・2		1・3	0・2	1・1	0・1	1・0	0・1	0・1	0・2						27 (9・18)	74
	12	オイ	0・2	1・3	3・1	0・1	0・2	2・1		1・2	0・1	4・1	2・4	2・4	0・1	1・2	1・3		0・2	2・3	2・0		2・0		56 (23・33)	29
u + i	13	ヨウスイ	3・2	2・2	3・3	4・2	2・1	1・2	3・1	2・4	3・3	2・4	2・4	0・4	4・4	2・4	1・6	0・4	1・2	4・4	0・1	3・0	1・1	4・3	115 (31・64)	59
	14	キライ	2・1	2・3	3・2	3・3	0・3	3・1	1・2	3・4	2・4	3・3	1・2	2・2	3・3	3・4	0・4	1・2	1・2	4・3	1・0	3・0	3・2	5・4	108 (52・56)	56
	15	ユイ		2・1	2・0	1・0	0・2	1・0	1・3	1・0		2・2			2・0	0・4		1・0	0・2	1・0		1・0			29 (14・15)	15
	16	ウイ			1・0			0・1	0・1						2・0				0・2						7 (3・4)	4
i + i	17	ウミイ	1・0	1・0				1・2	1・2		1・0	1・1	0・1			1・1	0・1	1・2	1・1	1・0		1・0	2・0	0・1	22 (12・10)	11
	18	カキイ	0・1	1・0	1・0	0・1		1・0								1・0		1・2							9 (5・4)	5
	19	ヒイ		1・0	1・0													0・1	0・1						4 (2・2)	2
n + i	20	イイ																								0
	21	キンカンイ																								0
	22	ジテンイ																								0
	23	ドカンイ																								0
	24	ボンイ																								0

(昭和27年7月調査)

表6 大分県下調査地点(市及び大野郡を除く)

番	郡	町	村	番	郡	町	村	番	郡	町	村
1	東国東郡	姫島	村	26	大分郡	由布院	町	51	下毛郡	今津	町
2		富来	町	27		阿南	村	52	直入郡	下竹田	村
3		国東	町	28		湯平	村	53		長湯	町
4		上国崎	村	29		今市	村	54		都野	村
5		旭日	村	30		野津原	村	55		白丹	村
6	西国東郡	三浦	村	31		竹中	村	56		城原	村
7		上真玉	村	32		吉野	村	57		宮城	村
8		朝田	村	33		川添	村	58		玉来	町
9		田染	村	34		大在	村	59		松本	村
10	宇佐郡	深見	村	35	北海道郡	佐志生	村	60	菅生	村	
11	下毛郡	深秣	村	36		上北津留	村	61	荻	村	
12		山口	村	37		南津留	村	62	入田	村	
13		本耶馬溪	村	38		保戸島	村	63	宮砥	村	
14	下毛郡	深耶馬溪	村	39	南海部郡	東上浦	町	64	大野郡(22か町村) は別紙	姫岳	村
15		山国	村	40		東中浦	町				
16	速見郡	大神	村	41		明治	村				
17		山浦	村	42		上野	村				
18	日田郡	小野	村	43		切畑	村				
19		夜明	村	44		木立	村				
20		東有田	村	45		蒲江	町				
21		五馬	村	46		直見	村				
22		前津江	村	47		中野	村				
23	中津江	村	48	因尾		村					
24	玖珠郡	東飯田	村	49	重岡	村					
25		飯田	村	50	小野市	村					

(昭和27年7月調査)

⑭ ジーイ アゲンコツースルモンジャキー、トットツマランワイ。

(爺があんなことく境界争い)をするものだから全くだめですよ。)(A→C)

⑮ マーニーイ、ナバンゼヌーモッチキタデー。

(正利兄さんが、椎茸の代金をもって来ましたよ。)(B→A)

[n+ガ]

⑯ ヒャクエンガ アルキーオクワシガネーナリー、コーチキー、ワガイイチキー。

(百円札が、あるからお菓子が無いなら、買ってきなさい。おまえが買ってきなさい。)

(A→D)

[u+ガ]

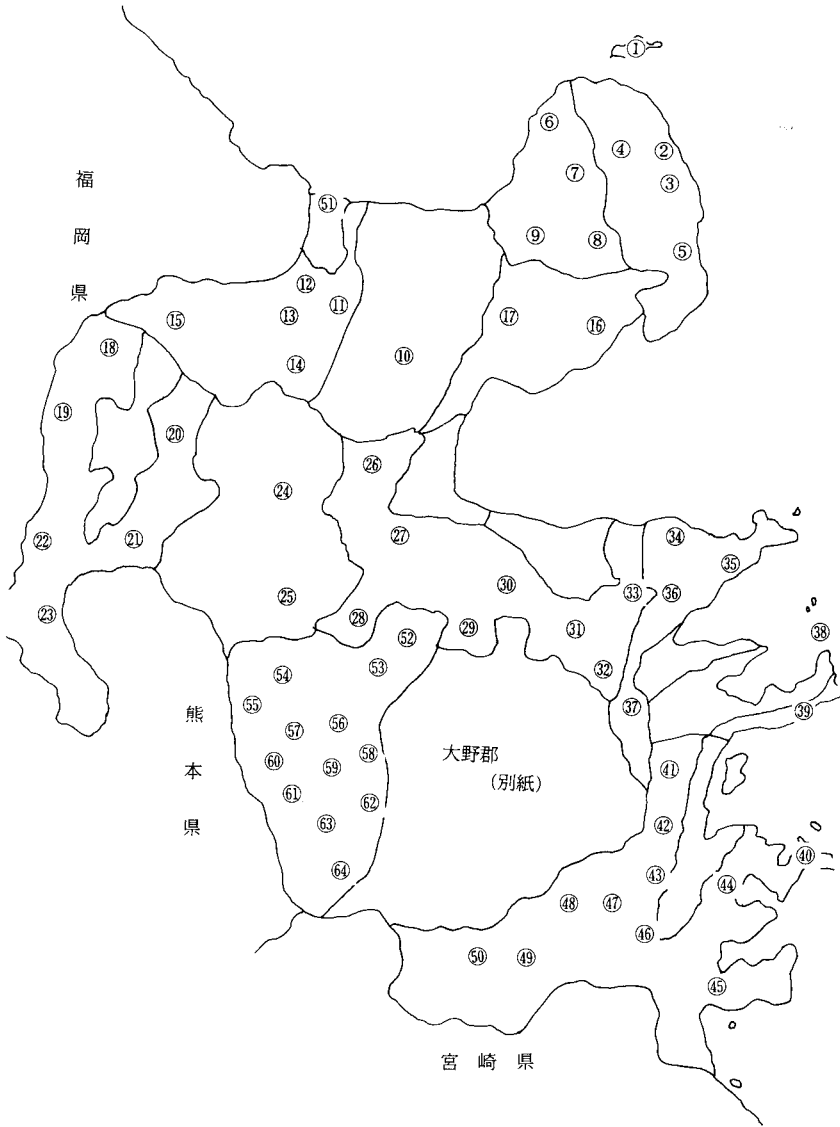


図2 大分県下調査地点 (除市及び大野郡)

⑰ アシターニチヨーカヤ, バスガアルカノ
ー。

(明日は日曜だったかねえ、バスが動きますかねえ。) (A→C)

[e+ガ]

⑱ アイツガワリーンジャ, アゲンコツーサシ
エチー。

(彼奴が悪人だ。あんなことをさせて。)

[o+ガ]

⑲ イーエガジェケタカ, モッチキチーミヨ。
(良い絵がかけたかね、もってきてごらん。)
(A→D)

⑳ ソゲン コガアルモンカ マックリー。

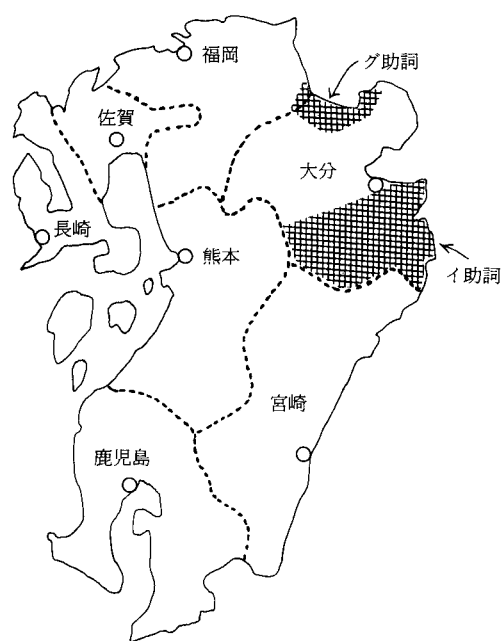


図3 主格助詞「イ・グ・ガ」の使用地域

(そんな粉があるものですか、まっくろい色だなんて。)(B→C)

[a + ガ]

- ② スマヤキンセンギーカガ, イラナーヤツパ
イカン。
(炭焼の専門家が、〈山に〉入らなければや
はりいけない。)(A→C)

以上の会話を中心に多くの例を採録したが、その時の話題にもよろうし、短時日に、しかも調査者の意図した場合のみ抜き出したということなどから、問題は多々残るが、一応の「イ」助詞の使用実例が把握できたと思っている。

主格助詞「ガ」に圧されているとはいえ、大野川の流域、とりわけ大野郡の中心地は「イ」助詞の独占場といえそうである。[表7]にみるように、会話を通して主格助詞が88例使われていた中で「イ」助詞使用の割合が62.5%、残りが「ガ」助詞(37.5%)というわけで、当地域で

は「イ」助詞は全く日常化しているといえるようである。

(3) 調査結果の分析

第一次調査は、前述のとおり、第1回予備調査(S27・5)・第2回補足調査(S27・7)に加えて、平行して実施の臨地調査(S27・7)の三つの方法ですすめてきた。その条件や調査方法などは述べてきたとおりである。

① 調査方法と調査結果の概要

[表3](その1・その2)は、第1回予備調査地点とおおむね重ならない地区を選んだわけだが、当該地区の教員を通して依頼したために、回収率はほぼ100パーセントであった。が知人依存の傾向もあって、郡町村の選び方に今一步という難はまぬがれなかった。1町村1名あての調査というのも問題であったと思う。

「イ」助詞は調査者にとっては全く日常語化していて意識にも止めていなかったものだが調査しているうちに、どうも母音に関係があるように思えてきた。

「どんな体言の下にも附いて『が』と同様、主語を導き出す。」(三ヶ尻浩)のことと同様、調査者もどんな体言にも附くと思っていた。がどうもちがうようである。「イ」助詞の前にくることばの最後の音節や単音つまり母音の種類、音節数によって、「イ」になったり「ガ」になったりするのではないのか、と調査内容を[表3]のように作成した。「車がない」を「クルマイネー」すなわち「kuruma ine—」の[a + i (イ)]というように設定したわけである。なお音節数のちがう名詞を並べてその接続状態をもみることにした。(後述)

市及び大野郡を除く他郡における「イ」助詞の使用状況をみると、北海道郡・南海部郡・大分郡・直入郡の町村において特に使用されている。これは大野川流域周辺の町村のみということである。

また一方では西国東郡上真玉村、第一回予備

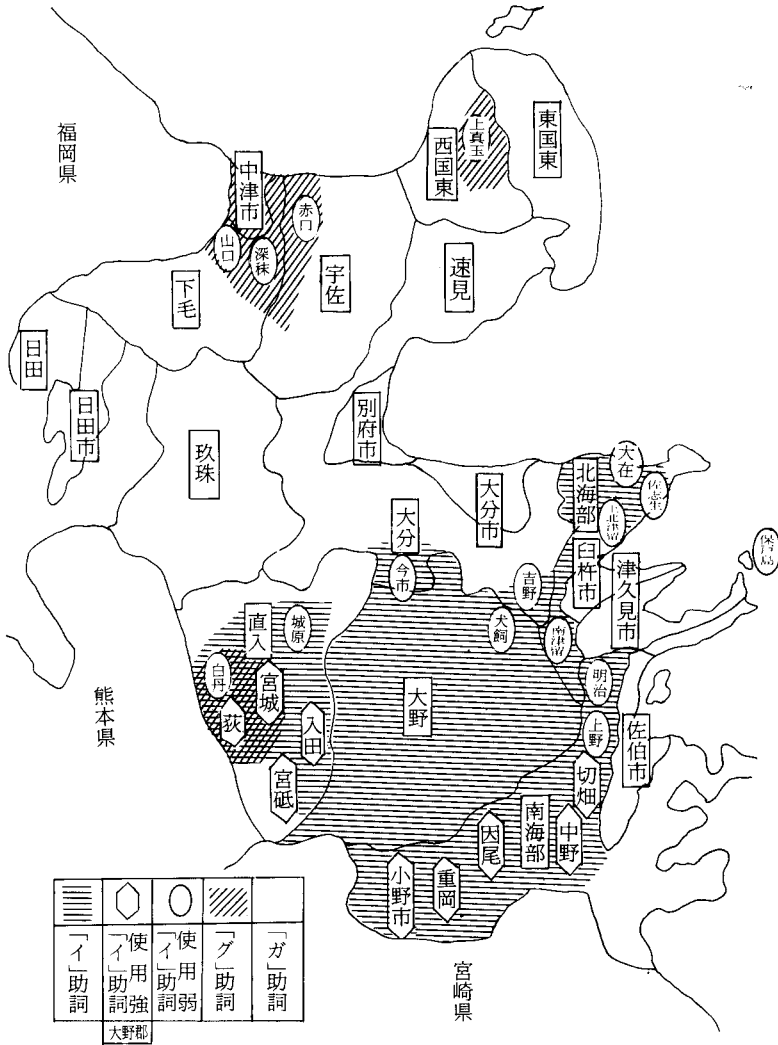


図4 助詞「イ・グ・ガ」分布状況
昭和27年調査

表7 主格助詞「イ・ガ」の使用頻度 (一般人)

頻 度		イ 助 詞 62.5%					ガ助詞37.5%	
内 訳	語末の母音	a	o	e	u	i	計	a o e u i
	回 数	19	16	11	8	1	55	33
	%	21.6	18.2	12.5	9.1	1.1	62.5	37.5
	総 回 数	88						

(昭和27年7月調査)

調査での下毛郡深秣村・山口村・あたりにみられる「グ」助詞の使用。これらは何れも県北に偏ってみられる現象である。〔図3・4〕

なおこれらとは別に保戸島(第一回調査)及び直入郡白丹村、荻村に「グ」助詞のあることが判明してきた。出向いて詳しく再調査する必要があるが、何れにしても白丹村・荻村の「イ」「グ」「ガ」の混用は注目を引く現象といえよう。〔図4〕

〔表5〕は「イ」助詞使用の本場、大野郡内の調査結果である。若年層の方言意識を知りたくて前述の他郡町村の調査〔表3〕のように対象を中学生とした。

今回の調査〔表5〕は大野郡内各校8名程度の中学生を対象に臨地に調査をしていった。できるだけ男女半々、校区内のバランスを考えて地区を選んでもらった。郡内全域にわたり約200名の調査者を得て、「イ」助詞の使用に制約のあることが、他郡調査と合せてはっきりしてきた。郡内町村の中で「ガ」に圧されて殆ど「イ」助詞の使用が認められない処は、犬飼町のみである。が犬飼は大野郡とはいえず、地理的にみても生活圏が大分市寄りである。次いで緒方町だが、これも生活圏が竹田市寄りとみられている。被調査者にもよるが「イ」助詞の使用度が低いようである。この両者の中間、大野郡の中心にある三重町は、野津町・大野町の山間都市と並んで「イ」助詞の使用度が高い。他の町村についても何れもが山間部のせい、等しく使用度が高く、「イ」助詞の本場らしい現象を呈しているといえよう。

② 「イ」助詞の機能

〔表3〕・〔表5〕にみられるように、「イ」助詞が接続しやすい母音は表5の百分率が示すように「朝がきた」の「アサイ」をはじめ「クルマイ」「イロイ」「モモイ」「ウメイ」「ミギテイ」「ヨウスイ」「キフイ」の順、つまり「a」「o」「e」「u」「i」の順に「イ」は付きやすいようである。

しかも表のとおり、「a sa」「ku ru ma」・

「u me」「mi gi te」・「i ro」「mo mo」・「ki hu」「yoo su」・「u mi」「ka ki」のように2音節以上のa・e・o・u・iにはまず「イ」がつづくようである。

ただし、2音節以上といっても「n+イ」の形は全く成立しないとみえて、撥音つまり、はねる音には、いかなる場合も「イ」はつづいていない。例えば〔表2〕の「きんかんがなった」の場合、「kinkani(イ)」とはならず「kinkanga(ガ)」とそのまま「ガ」が使われるということである。

また、「絵が多い」の「e」,「緒が切れた」の「o」,「鶉がもぐった」の「u」のような1音節1単音からなる母音には「イ」は、付きにくいとみえて用例も極めて少ない。(後述)

なおまた、「胃が強い」のような場合は、「i+ga(ガ)」となり、「i」には「イ」はほとんどつづかない。が、たまに用例のみられることもある。

次に前述のB, 実地調査(採録)に示した用例から「イ」助詞関係を拾い上げ整理してみる。

(○印の数字は調査項目番号を示す)

{i+イ}・{i+ガ}

- ④ モミがヒル(枳が乾く)
- ⑤ フハツントキガアル(鉄砲の)不発の時がある。)
- ⑭ ジーイアゲンコツー…(爺があんなことを…)
- ⑮ マーニーイ(正利兄さんが)

のように、主格助詞の「ガ」の前の単音が母音「i」で終る場合はたいてい「i+ガ」の形(④・⑤)をとる。がたまに⑭・⑮のように「i+イ」の形がみられる。この場合は比較的親しみをもった表現のようである。

{n+ガ}

- ⑥ ジシंगाアルモンナ(自信があるものですか)
- ⑨ モチンアंगाネー(餅のあんこがない)
- ⑯ ヒヤクエンが…(百円札が…)

のような場合は、いつも「n+ガ」で「n+イ」とはならない。

[□□□+ガ]

「i+ガ」は前述のとおりだが、その他の場合をみると、

- ⑰ バスガアルカヤー (バスが動きますかねえ)
basu+ガ
- ⑱ アイツガワリー (彼奴が悪い) aitu+ガ
- ⑲ エガデケタ (絵がかけた) e+ガ
- ⑳ ソゲンコガアルモンカ (そんな粉があるものですか) ko+ガ
- ㉑ スミヤキンセンギョーカガ… (炭焼の専門家が…) sengyooka+ガ

この用例から

○外来語

同じ外来語でも「バス+ガ」と「ガ」が附いたが⑬の「トラック+イ」のように「イ」の附く場合もみられる。これはバスは公的、トラックは私的交通機関という意識が働いているのではなからうか。

○「彼奴」という相手を卑下した語。

○「絵」という1音節1単語からなる語。

○「専門家」という日常生活に耳遠い語。

などの場合には、「イ」でなく「ガ」が付きやすい。いわば一種の改まった感じの場合である。

なお「ソゲンコガアルモンカ」の場合、「ko」だから「o+イ」となりそうであるが、「o+ガ」となっている。このことばのあとには「粉というものはこうあるべきですよ」といった強い希求の念が働いている。例えば「マメン手ガタオレタ」(豆の手が倒れた)、「ウランタガクエタ」(家の裏の田んぼの畔が崩れた)などの場合、あとに「早く手をたててやらねば」「早く畔の崩れをもとどおりにしなければ」とかいう希求の強い念がみられる。こういう場合に「イ」でなく「ガ」が働くというのも改まった形とみていいのではなからうか、「ガ」は訪問着、「イ」は普段着といったところであろう。

[準体助詞「no」+イ]

- ⑩ ウチカタンノイ、クイスゲチー (私方の子

供がたべすぎて)

- ⑬ オマエカタンノイ、ネートモータラ (あなたの家の〈供出来〉が無いと思ったら)

のように準体助詞のあとには「イ」が付きやすいようである。

「o+イ」の形と同じ働きなので「イ」が付きやすいのも当然かと思う。

(4) 文献による調査

「イ」助詞に関するこれまでの研究文献は前述の研究史のとおりである。が、ここでは語りつがれてきた豊後浄瑠璃の「イ」助詞及び万葉集等の古代助詞「い」をみていく。

① 豊後浄瑠璃

「何時頃から行はれたものか、不明、純粋な方言を以て綴った一種の語り物である」(三ヶ尻浩『大分県方言』p.137)

豊後浄瑠璃は現在ではあまり語られていないが、何か催しごとのある時などには時折り年配者によって語られる。語り方も、語る内容も一定してはなく、口三味線によって、自分の好きなように語る。滑稽を旨とした方言による浄瑠璃である。ただし、あらずじは、渡辺綱の鬼退治に一定しているようである。場所は羅生門とか大江山とかで一定していない。種類も多く、何れが本源で何れが派生かはわからない。

ア. 北豊後地方で語られる詞(三ヶ尻浩『大分県方言』(p.141)

イ. 大分郡辺りで語られる詞(三ヶ尻浩『大分県方言』(p.141)

ウ. 利光諒一(昭和8年、鶴崎小学校長)の寄せたもの(堀江与一『大分県方言考』(p.216)

エ. 北原白秋「季節の窓」所載・(堀江与一『大分県方言考』(p.216)による。

オ. 橋爪義人(昭和8年、大分師範学校教諭)の口授したもの(堀江与一『大分県方言考』(p.221)

この5つの中にみられる「イ」助詞を拾ってみると、「イ」助詞使用は、ア、イ、ウ、の3つ、エは「グ」、オは「ン」をそれぞれ相当位置に使っている。

ア. 「斬ルル斬レンナ鍛治屋イ(ン)知ツチョル光レ光レ…」。

イ。「斬ルル斬レンナ鍛治屋イ知ツチョル…」。

ウ。「切るる切れんなかぢやい知っちよる光れ光れ…」。

エ。「切るる切れんな鍛治屋ぐ知っちよる光れ光れ…」。

オ。「切るる切れんな鍛治屋ん打っちようん研ぎようん勾べえん理窟のぐはええによる光れ光れ…」。

この浄瑠璃からみても大分県を南北に分けて、南の「イ」助詞・北の「グ」助詞というのがよく伺える。エは文中に「おへまぐ」「鬼のうぢえぐ」「婆ぐ」「おりぐ」「俺が」と主格の「ガ」に相当する位置にはすべて「グ」が使われ、北豊後の詞章の特色をみせ、オは「鍛治屋ん」となっているが、他に6か所「グ」を使用、これも北豊後系、アは他に3か所「グ」を使用し、「鍛治屋イ」以外には「イ」の使用がない。これからすると「鍛治屋ん」という付加の「ン」の使い方のほうが正しいのかも知れない。イ、ウ、が、大分郡辺りであり、鶴崎小学校長云々ということからみて、大野川下流に盛んであったと思われる。「イ」助詞の昔をしのぶ手がかりになるかと思う。

豊後浄瑠璃は、「イ」または「グ」の使用によって南北豊後浄瑠璃に区分できるというわけである。

② 万葉集・その他

- 玉緒乃不絶射妹跡結而石 (卷3・481)
たまのをのたまえじいもとむすびてし
- 過西恋以乱今可聞 (卷12・2927)
すざにしこひいみだれこむかも
- 家有妹伊将 薺悒 (卷12・3161)
いへなるいもいいぶかしみせむ
- 波播已毛禮杼母 (卷14・3393)
ははいもれども

古助詞「い」はこのように万葉集では、射・以・伊・已等と表記されているようだが「伊」が一般的に多く使われていることから「い」は「伊」とも表記される。

古助詞「い」について此島正年は次のように述べている。

- 近江のや毛野の若子伊笛吹き上る(紀17・

98)

- 紀の関守伊留めてむかも (万4・545)
- 京職大夫従三位藤原朝臣麻呂等伊図負へる亀一頭献らくと… (第6詔)
- 子は祖の心成伊自子にはあるべし (第13詔)

等、名詞や用言連体形で主格に立つ語を受けている。この種の用例は、万葉に6例、宣命に10数例あり、平安朝に入っても訓点語にかなり普通に用いられたことは山田氏が指摘(『奈良文法史』p.421)し、その後の諸家の研究でいっそう明らかにされている。(『国語助詞の研究・助詞史素描』p.435)

この用例にみる「伊」の使い方は、大分県方言「イ」助詞の使い方と全く同じにとれる。

- wakugo i (o+i)
- sekimori i (i+i)
- ……nado i (o+i)
- kokoronari i (i+i)

のように「o+i」「i+i」である。「i+i」については前述のとおりだが現在の方言「イ」助詞では用例が少なく「i」に「イ」は付きにくくなっている。この点上代の「伊」は抵抗もなく自在に働いていたのであろうか。

三ヶ尻浩が『大分県方言』の中で

主格を示す「ガ」の音韻変化を遂げた一の形であるかとも考へるが意味に於いては、古い伊と少しも異なる所はない。(p.118)

と述べているが、大分方言「イ」は「い」と意味の上では全く同じであるという点同感である。「方言に古語存す」というが、古代助詞「い」の残存として方言「イ」助詞が考えられるか否か、奥里将建の古代助詞「い」の残存説(研究史に既述)があるが、今後の大きな課題であろう。

なお万葉集の用例からして、「い」は単独で主格の語を受ける用法のほかには係助詞「は」・間投助詞「し」と共に用いられるとされている。

- 語れ語れと詔らせこそ志斐伊は奏せ (卷3・237)
- 一日だに君伊之無くはたへがたきかも (卷4・537)

古代の「い」には「は」「し」等の助詞が重なり得た(山田孝雄)ようだが、大分方言の「イ」にはその用例は見あたらない。次のような場合等はある。

- ミルダケイヨーヨージャ(見るだけがやっただ)
- トブニャーイチジカンホズイチョーズイナー(走るのには1時間ほどがちょうどよいです)
- コレサエイデケンジョッチ、ナンガデクルカ(これさえができなくて、何ができますか)
- コレムソージャガ、ソレナンドイ(ガ)ワリンジャ(これもそうだが、それなどがわるいのだ。)
- ココマジェイオマエンカタンジャ(ここまがあなたのうちのです。)
- メシュークイナガライイーノー(ごはんをたべながらいいねえ。)

近代語の主格助詞「ガ」は係助詞「は」とは併用されないというのが「イ」助詞の場合も同じである。「イ」助詞には「体言+副助詞+イ」「用言+接続助詞+イ」等の形はみられる。が「イ」助詞のあとに他の助詞の接する用例はないようである。

(5) 「イ」助詞の環境

① 地理的環境

「イ」助詞は大野川流域周辺の生活語である。大野川は、源を大分県と宮崎県との県境にある祖母山(1757メートル)に発し、北東方向に流れ、別府湾に注ぐ全長128.4キロメートルの大河川である。県内一の大きな河川であり、なお他県を通らず一県のみを貫流するという珍しい特徴をもっている。地勢的にみれば、大野川は直入郡・大野郡のほぼ中心部を貫流し、大分郡(現大分市)を経て鶴崎に出で、別府湾、瀬戸内海に注ぐ大河である。海に出るまでは、山容迫り、大野川全長(128.4キロメートル)の4分の3は全く山に囲まれたといった感じの河である。〔図5〕に示すように大野川は久住・祖母・傾山を源に、北側の1・久住山から8・本宮山までの山系、南側の9・九六位山から24・越敷山までの山

系に挟まれた豊かな流れである。

「イ」助詞はこの豊かな河のほとりの山間部に発達してきた。大分市に近い下流地域では、今市村(現野津原町)・吉野村(現大分市)・北海部郡の海岸部にもわずかながらだが「イ」助詞がみられた。(昭和27年現在)〔表3の1〕

「このイは、大野・北海部郡の農山村に盛んに用ひられたもの」(三ヶ尻浩)といわれているとおり昔は大野川の全域周辺の農山村に盛んに使用されていた名残りであろうかと思われる。

「イ」助詞の中心地大野郡は大きくみて盆地である。外とのつき合いがはげしくはない。大野郡の門戸犬飼町・竹田市寄りの緒方町については既述のとおりだが、同じ大野川の上流に位する竹田市は、どこから入るにしてもトンネルを通らねばならない。それに隣接する上井田村(現朝地町)、小富士村(現緒方町)などは、堰堤下の溜りにとどまる魚にも似て「イ」助詞にこと欠かない地区である。〔表5〕

② 社会的環境

大分県ほど小藩郡立の県はないといわれる。小さな藩がひしめき敷かれてきた、〔図6の1・2〕。「イ」助詞の活動舞台大野川周辺の幕末における諸藩をみると、上流からまず岡藩(中川・7万石)、臼杵藩(稲葉・5万石)、府内藩(大給・2万石)それに肥後領となっており、そのまわりに、佐伯藩(毛利・2万石)森藩(久留島・1万石)、日向領、と累々たる相を呈している。それだけに生活語の孤立化がみられたことと思われる。

「イ」助詞の使用されている南海部郡の切畑・重岡村・小野市村(現宇目町)はもと大野郡所属。岡領であった。中でも小野市村の木浦には鉾山(錫・銅)があつて岡藩からの人々の出入りが多く、木浦鉾山(村名)として活況をきわめたという。その関係からか、因尾村、中野村(現本匠村)、切畑村、中野村、明治村(現弥生町)あたりまで「イ」助詞の使用がみられるのであろう。〔図4〕

豊の国大分の『ふるさと選集』(大分県観光協会・昭和61年)に次のような1節がある。

大野川は大分の「母なる川」と呼ばれる。
—中略—この上中流は豊後風土記にいうところの「大いなる野」の地であり、大



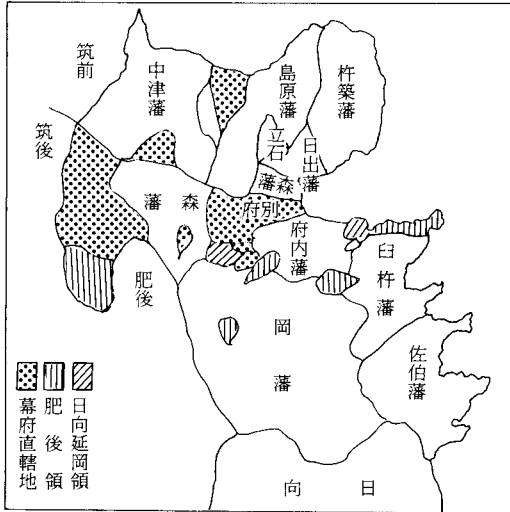
図5 大野川流域図
 『大野川』(大分大学教育学部・昭和52年)による。
 (10~19及び下表標高調査者追加)

分県人のゆりかごの地の一つ。各地に縄文・弥生時代の遺跡が集積し、古代には緒方惟栄を頭領とする豊後武士団が馬をかり、中世には大友氏がここを本拠地として発展した。

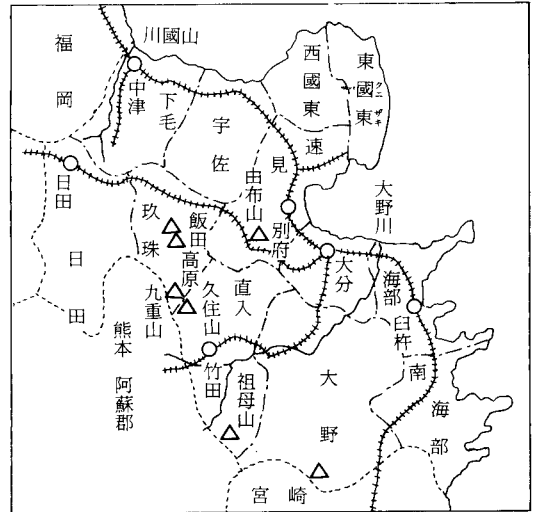
そしてこの間、大野川流域を主体に、大分川下流域、豊後水道沿岸にかけて大きな古代文化圏が誕生した。これを仮に「大野文化」あるいは「大野川文化」と称している。それは宇佐・国東の文化に匹敵する見事な神仏習合の文化だった。特異なのは磨崖仏の多さ。菅尾石仏をはじめ、大分を、いや日本を代表する石仏が集中し、有名な臼杵石仏もまた、この文化圏に属している。一略一 (p.165)

番号	山名	標高	番号	山名	標高
1	久住山	1786	13	姫岳	383
2	大船山	1787	14	椿山	659
3	木原山	869	15	楯ガ城山	610
4	亀ヶ岳	768	16	佩楯山	754
5	烏帽子岳	815	17	三国峠	664
6	御座ヶ岳	796	18	稻積山	583
7	障子岳	750	19	御嶽山	601
8	本宮山	607	20	傾山	1602
9	九六位山	452	21	本谷山	1643
10	戸塚山	295	22	古祖母山	1633
11	松嶽	523	23	祖母山	1757
12	縦木山	484	24	越敷山	1070

圖略置配藩諸末幕



圖地略縣分大



調査報告書添附の圖に據つた。
上圖は明治三十九年發行の國語調査會、口語法

神領	宇佐町附近	宇佐八幡
主なる幕府直轄地	日向	別府等
玖珠郡森	久留島氏(一萬石)	
南海部郡佐伯	毛利氏(二萬石)	
大分郡府内(大分市)	大給氏(二萬石)	
速見郡日出	木下氏(二萬石)	
速見郡杵築	松平氏(三萬石)	
郡臼杵	稲葉氏(五萬石)	
北海部	中川氏(七萬石)	
直入郡岡(竹田)	奧平氏(十萬石)	
下毛郡中津	日向	

豊後	豊前
大分市	中津市
別府市	宇佐郡
大分郡	下毛郡
大野郡	計一市二郡
直入郡	
玖珠郡	
日田郡	
西證東郡	
東證東郡	
南海部郡	
南海部郡	
速見郡	
計二十市十郡	

圖6の1 『大分県方言の研究』(三ヶ尻浩)による。

大野川はこのように古代から大野川文化をもたらしってきた。特に仏教的文化、それも磨崖仏の多さに特色をみるという。何か野趣に富んだ山村の、のどかな生活様相を思い浮かべるのだが、こういうなかにも「イ」助詞のもつ地域的要素の一つがあったのかも知れない。

現在「イ」助詞のみられる地域のほとんどは岡領に相当する。豊後の国の雄藩岡藩と「イ」助詞とは何か関係があるのか、もともと「イ」助詞は岡藩のものではなかったのかなど、これも今後の課題の一つかと思う。

(6) 「イ」助詞の特色

① 音韻上の制約

- ア. 「ん」で終る語には「イ」は全く附かない。「ガ」が附く。
- イ. 「い」(イ列音で終る語)には、ほとんどの場合「イ」は附かない。「ガ」が附く。だがたまに「イ」が附く。「ジーアゲンコツー(爺があんなことを)(既述)
- ウ. 母音「a」「e」「o」「u」の順に「イ」助詞は付きやすい。
 - 開母音「a」「o」「e」への接続は「u」「i」に比べてはるかに高い。[表5・7]
 - 2音節以上の語に、「イ」はつきやすい。
 - 但し、2音節以上でも改まった場合には「ガ」が使われる。「スミヤキのセ

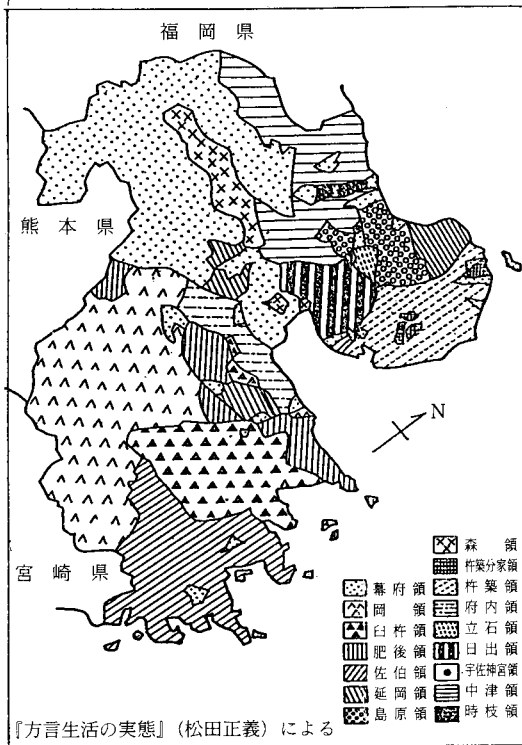


図6の2 大分県藩別地図

ンギョーカガ」(炭焼きの専門家が) (既述)

エ. 1単音の語にはほとんどの場合「イ」は附かない。「ガ」が附く。「エイアル」とは いわずに「エガアル」(絵がある) という。(既述)

② 語法上の機能

ア. 「イ」助詞は、主格助詞である。「ヤマ イタケー」(山が高い。)

イ. 名詞・代名詞・形式名詞・準体助詞と結合しやすい。

- 「イエイアル」(家がある。) 名詞＋イ。
- 「オレイシュー」(俺がしよう。) 代名詞＋イ。
- 「ソンコトイキニナル」(そのことが気にかかる。) 形式名詞＋イ。
- 「コンノイワリー」(来ないのが悪い) 準体助詞＋イ。

③ 分布の地域性

- ア. 「イ」助詞の使用地域は県の南半分である。
- イ. それも大野川流域周辺に限られている。
- ウ. 特に岡藩・山間部ほど使用度が高い。

④ 古助詞「い」との関係

- ア. 上代文献・中古訓点資料の中に「イ」と同じ働きを示す「い」助詞がある。(前述)
- イ. 万葉集をみるのに「伊」「已」「以」「射」の字をあて、なかに主格にとった用例がある。(述)
- ウ. 「イ」助詞と「い」助詞の結びつきの有無は今後の大きな課題である。

以上「イ」助詞について、音韻的、語法的、地理的、社会的にまとめてみた。これは「イ」助詞の調査を始めてから今日までの資料を通じてのものであって、決して結論的なものではない。

2. 第二次調査 1980年 (昭和55年)

1952年(昭和27)に第一次調査を実施して以来、本年まで約30年に近い空白がある。第一次調査結果でわかるように、かつては日常語化していた「イ」助詞だがその後どうなっているか、本年8～9月、大野郡内の中学生を対象に質問調査を実施した。なお、一般人についても臨地調査質問調査を試みてみた。〔表8・9〕

(1) 一般対象者18名を無作為抽出、大野川にそって調査してみたが、第一次調査(昭和27)のときと同じように「イ」助詞は日常語として用いられていたが、竹田市玉来地区、大分市浜地区では、被調査者の選び方に問題がないではなかったが、ついに「イ」助詞は見出せなかった。〔表10〕

なお臨地調査では第一次と同様、調査者の郷里(清川村)を対象に会話を集録「イ」助詞の健在ぶりを確認できた。(一次調査と同じ結果なので省略)

表8 方言調査

おそれいりますが、次の1～15の文を、あなたの住んでいる所の方言で、書いて下さい。

書きかたは、漢字を使わないで、すべてカタカナで、しかも発音どおりに記入下さい。その前に、下記の、記入者欄を書き込んで下さい。

1. 回答者

校名	県市町村	立	高等学校	
			中学校	
ふりがな 氏名			学 年	年
性 別	男 女		性 別	才
調査月日	昭和 年 月 日 ()			
現住所	県	市郡	町大字	町字

2. 調査内容

1	朝が、きた
2	車が、多い
3	母音には、「い・う・え・お」のほかに「あ」がある。
4	右手が、わるいので、絵がかけない。
5	手が、とどく。
6	梅が、なっている。
7	リンゴが、雨にぬれて、色がきれいである。
8	げたの、緒が、切れた。
9	彼のように、おかしい。
10	鶴(う)が、水にもぐった。
11	胃(い)が、いたむ。
12	柿がなっていた。
13	火が、もえている。
14	お盆(ぼん)が、やってきた。
15	ジュースのあきかんが、散らかっている。

3. 「雨が降る。」について、次の記号の該当するものを○で囲んで下さい。(いくつでもよい)

1. アメ イ、フル。と知っている。
2. アメ グ、フル。と知っている。
3. アメ ガ、フル。と知っている。
4. 「アメイ」というのを聞いたことがある。
5. 全く聞かない。
6. 「アメグ」ということを聞いたことがない。
7. 聞いたことがある。

※ だいじな、時間をいただき、ありがとうございました。

表9 方言調査

「なにになにがどうする」というときの「が」に当ることばに、ところによっては、次のようないいかたがあります。

- ① アメイ、フル。
 ※ 雨が、降る —— ② アメグ、フル。
 ③ アメガ、フル。

「が」を「イ」または「グ」といっているわけです。

次の2の調査内容の場合はどういっているのでしょうか。下記の「記入上のお願ひ」にしたがって、御地の、できるだけ純粋な方言でお書き下さい。

〈記入上のお願ひ〉

1. 語順はできるだけ原文にしたがひ、句読点をうって下さい。
2. 記入は、(例)のようにすべてカタカナで、発音どおりにお書き下さい。

(例) 私は =ワタシワ (ワタシハとは書かない)
 本を =ホンオ (ホンヲとは書かない)
 大分市=オーイタシ (オオイタシとは書かない)
 大きい=オーキー (オオキイとは書かない)

※それではまず、回答者欄に該当事項をお書き込みの上、2・3とご回答下さい。

1. 回答者

調査月日	昭和 年 月 日 ()				
ふりがな氏名				職業	
性別	男 女		年齢	才	
出生地	県	市郡	町村	大字	字
現住所	県	市郡	町村	大字	字 電話

2. 調査内容

1	急ぐのなら、朝が、早いほど車が、少なくてよい。
2	アイウエオの、アが、むつかしくて、書けないという。
3	右手が、わるいので、絵が、かけない。
4	手が、とどく位のところに、梅が、なっていた。
5	桃が、なっているが、雨つづきのため、不作で色が、よくない。
6	げたの緒が、切れた。
7	80周年が、きたので、寄附が、多かったようだ。
8	うが、魚をとるときの、様子が、目に見えるようである。
9	食べた柿が、青かったからか、胃が、痛み出した。
10	流れ出た油に、火が、もえうつったので、海がまっかになった。
11	盆が、きたので、みんなそろって、お墓に参った。
12	ジュースのあきかんが、道にちらかっている。

3. 「が」と同じ「い」「ぐ」を使わない方は、次のABのどちらかを○で囲んで下さい。
 ※ アメイ、フル。 A、いわないが聞いたことがある。 B、全く聞いたことがない。
 ※ アメグ、フル。 A、いわないが聞いたことがある。 B、全く聞いたことがない。

表10 「イ」助詞使用状況 (一般人)

(昭和55年9月調査)

調査地	性別	年齢	職業	「イ」助詞使用の有無
竹田市玉来	男	30	商業	無
朝地町上尾塚	男	52	教員	有
朝地町市万田	女	53	主婦	有
緒方町井上	男	46	農業	有
緒方町徳田	男	47	教員	有
清川村轟	男	52	林業	有
清川村轟	女	16	高校生	有
大野町十時	男	48	教員	有
三重町赤嶺	男	43	教員	有
三重町秋葉	男	31	教員	有
三重町内田	男	74	無職	有
千歳村柴山	男	55	教員	有
野津町野津市	男	45	教員	有
犬飼町田原	男	35	農業	有
宇目町南田原	女	36	教員	有
宇目町小野市	女	26	教員	有
大分市中判田	男	43	教員	「グ」使用
大分市浜	女	33	教員	無

調査を実施したその問題点としては、

- ア. 年代別調査ができなかった。
- イ. 対象者 (男女) の数が少なかった。
- ウ. 自然観察・臨地調査 (録音) が少なかった。ことなどがあげられる。

(2) 大野川流域の中学生 (17校・619名) を対象に質問調査を行なった。〔表8〕その「イ」助詞の使用状況は次のようである。〔図7〕

大野川をはさむ南北の各中学校を対象にしたものだが、県西の竹田・直入地区・県東の大分犬飼地区ではすでに「イ」助詞を見出せなかった。使用する生徒がいなくなっている。総体的にみて、野津・千歳・清川地区に息づいている感じで、それも往年の活況に比べると、まことにさびしく、共通語化への進展のめざましさが

目に、耳につくのである。

千歳村は昔も今も大きい差はないようだが、野津町は、現在大野郡内でも最も高い「イ」助詞の使用地区となっている。日本オペラ協会「吉四六昇天」(方言を使用)など、吉四六さんの舞台として町をあげての関心が中学生の言語感覚を刺激しているのではないかとも思う。(野津町誌の方言の部には助詞「い」を掲示)

大野郡全体の「イ」助詞使用の平均をみると昭和27年当時は52パーセントであったのに現在(昭和55年)は僅かに13パーセントとなっている。まさに風前のともしびといった感じである。〔表11〕(図8・9)

(3) 音韻上の制約と推移

一次調査のところで述べた音韻上の制約を考慮して改作した質問調査用紙〔表8・9〕の内容にしたがって、大野川流域の「イ」助詞の使用状況を整理してみると、〔表13〕のようになる。「アサイ」(朝が)・「ウメイ」(梅が)・「クルマイ」(車が)・「ミギテイ」(右手が)・「リンゴイ」(リンゴが)の順に使用度が低くなっている。

なお、野津・重岡・千歳・清川地区の使用度は圏内でも高く、しかも幅広く使われていて「イ」助詞の活動ぶりが伺える。(表12)

ア. 「ン」で終る語には「イ」が全く付かなく、「ガ」が附く。

イ. イ列音で終る語には「イ」が付きにくく、「ガ」が付き、「イ」の附くことがまれであることは、30年前も今もかわりがない。〔表12〕

「イ」助詞の消えゆく状態はどうか、昭和27年当時と現在55年との使用率からその推移をみてる。(表13)

大野郡内の中学生を対象に、方言助詞「イ」の付きやすい語「朝」を例にとり「アサガ」を「アサイ」と表現する場合に限定し比較してみると、前回の第一次調査では、使用率が87パーセントであったのが今回の第二次調査では、僅かに6パーセントに激減している。1年間に約2.8パーセントの割合で使用されなくなった勘定になる。被調査者の選び方に問題があったに

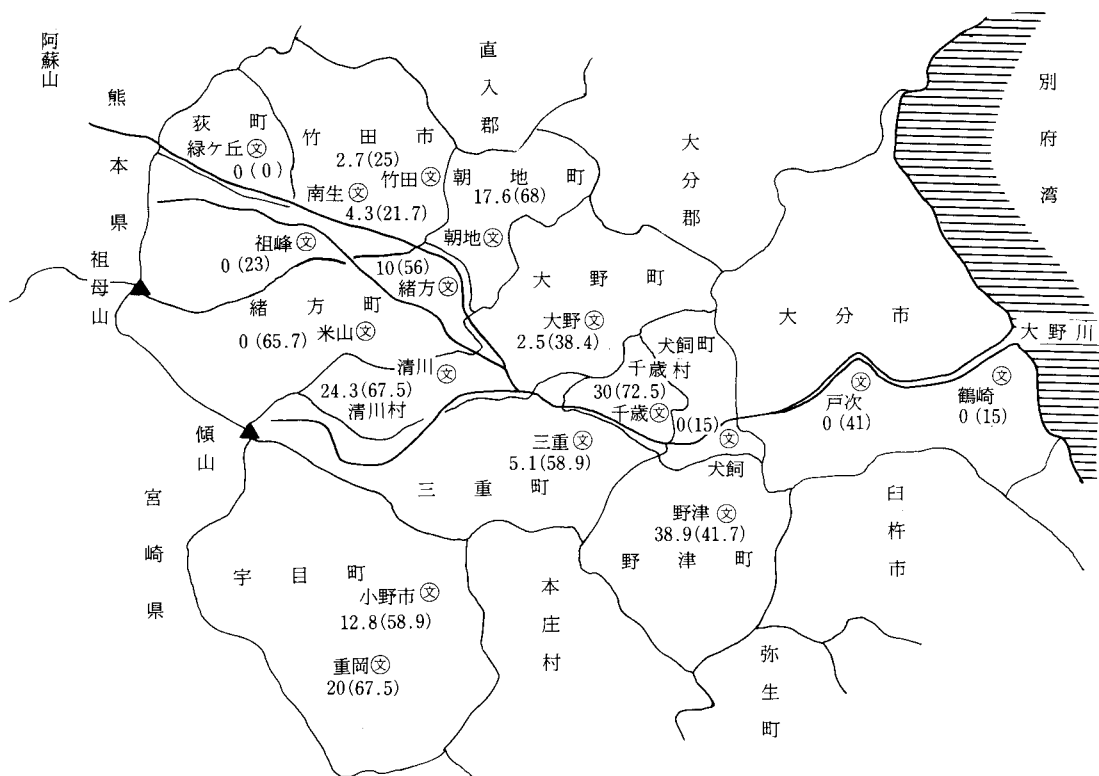


図7 「イ」助詞使用分布 (数字はすべて%)
 ()内は自分は使わないが聞いたことがある。
 (昭和55年9月調査)

しても、テレビ・ラジオ等による共通語化の躍進ぶりに驚くのである。

〔表13〕の番号1・2・6・7・8番の語末「a・o・e」の「母音+イ」の使用は、70パーセント以上もあったのに、55年では5.9~2.5パーセントに激減している。

「a・e・o」の開母韻に附く「イ」助詞は消えにくい、「u」に附く「イ」はまれとなり、「i」に附く「イ」はそれこそ消滅寸前といえそうである。

何れにしても「イ」助詞は消えてゆく、日本書紀・万葉集等の古助詞「い」が消え去ったように、それまでにもっと克明に観察し、分析し、その推移をみとどけたいと思っている。

3. 第三次調査 1987年 (昭和62年)

「イ」助詞に限らず方言全般について、その衰退状況を知ろうとすれば、若年層特に中学生を対象に調査するのが手っ取り早い。中学生は地域的にみてもその土地に密着しており、言語の発達過程からみても言語感覚が鋭くなる時期にあって、老壮年者の使用する方言をよく反映しがちである、と同時に共通語に対する美的感覚が養われ、時代の流れに応じた言語意識をもってくる時期でもある。こういう意味から調査者は常に中学生を意識してきた。

(1) 臨地調査 (対象中学生)

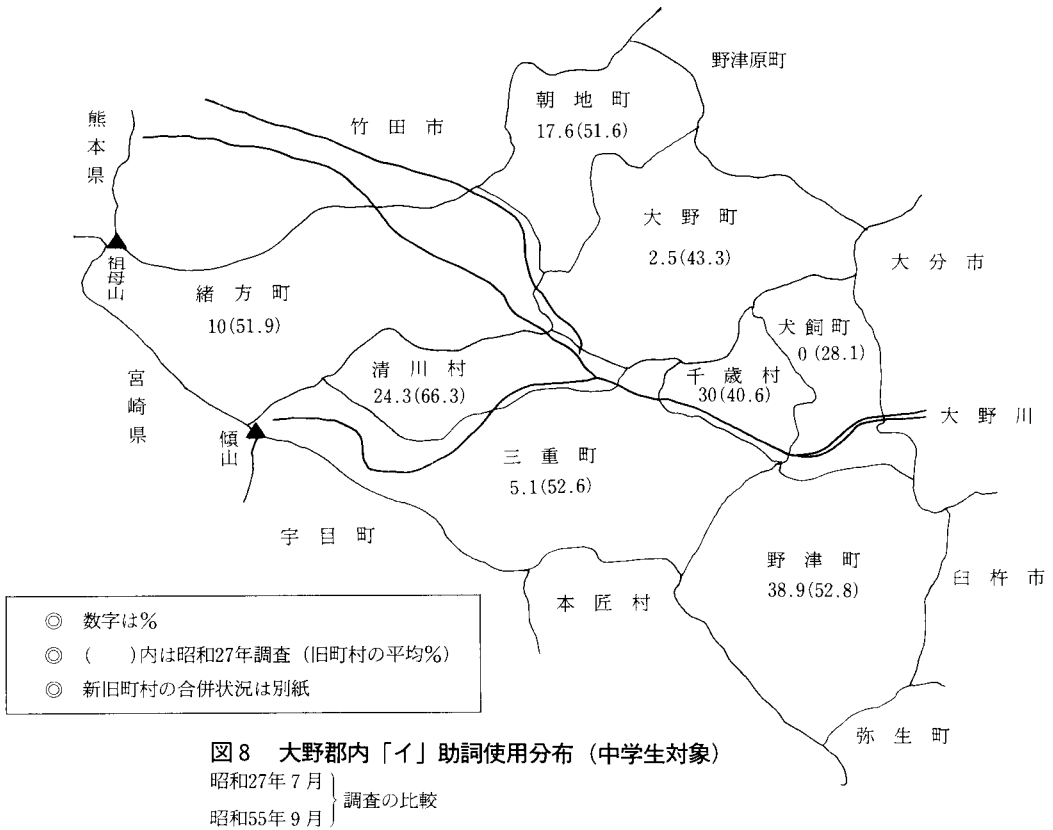
- ① 質問調査 (大分県大野郡清川村立清川中学校)

表11 町村別「イ」助詞使用推移 (大野郡)

中学生対象, 数字は%・() は自分は使わないが聞いたことがある。

旧町村 (昭27当時) 52%				新町村 (昭55現在) 13%			
町 村	中学校	使用数 調査数	%	町 村	中学校	%	
西大野	栗 栖	$\frac{17}{32}$	53.1	朝地町	朝 地	$\frac{6}{34}$ 17.6 ($\frac{22}{34}$ 68)	
上井田	大恩寺	$\frac{16}{32}$	50.0				
緒方町	緒 方	$\frac{15}{32}$	46.8	緒方町	緒 方	$\frac{4}{39}$ 10 ($\frac{22}{39}$ 56)	
小富士	小富士	$\frac{19}{32}$	59.4				
長谷川	長谷川	$\frac{13}{36}$	36.1		米 山	$\frac{0}{38}$ 0 ($\frac{25}{38}$ 65.7)	
上緒方	上緒方	$\frac{21}{32}$	65.6				
合 川	合 川	$\frac{23}{36}$	63.8	清川村	清 川	$\frac{0}{37}$ 24.3 ($\frac{25}{37}$ 67.5)	
牧 口	牧 口	$\frac{22}{32}$	68.7				
三重町	三 重	$\frac{23}{48}$	47.9	三重町	三 重	$\frac{2}{39}$ 5.1 ($\frac{23}{39}$ 58.9)	
新 田	新 田	$\frac{15}{32}$	46.8				
百 枝	百 枝	$\frac{15}{32}$	46.8				
菅 尾	菅 尾	$\frac{22}{32}$	68.7				
野津町	野 津	$\frac{18}{28}$	64.2	野津町	野 津	$\frac{14}{36}$ 38.9 ($\frac{15}{36}$ 41.7)	
田 野	田 野	$\frac{14}{28}$	50.0				
川 登	川 登	$\frac{14}{32}$	43.7				
南野津	南野津	$\frac{17}{32}$	53.1				
大野町 (含北部)	大 野	$\frac{13}{30}$	43.3	大野町	大 野	$\frac{1}{39}$ 2.5 ($\frac{15}{39}$ 38.4)	
千 歳	千 歳	$\frac{13}{32}$	40.6	千歳村	千 歳	$\frac{12}{40}$ 30 ($\frac{29}{40}$ 72.5)	
長 谷	長 谷	$\frac{18}{32}$	56.2	犬飼町	犬 飼	$\frac{0}{33}$ 0 ($\frac{5}{33}$ 15)	
犬飼町	犬 飼	$\frac{0}{32}$	0				

白山, 戸上は省く。



今回の第三次調査もその線にそって、中学生それも調査者の出生地(現大野郡清川村)の中学生、それに一般成人を含めて「イ」助詞の使用状況を確認することにした。調査はまず、例の〔表8〕を使用し、夏休み中の出校日を利用、大分県大野郡清川村立清川中学校に出向き全校生徒を対象に調査を実施した。全学年といっても110名、かつては村内のひとつの小学校だけでも600名を数えていたのに、今では全く過疎のあおりをうけている学校である。

調査結果は〔表14〕のとおり、第一次(昭和27年)・第二次(昭和55年)調査の結果と同じく、「イ」助詞は名詞次第によっては確実に後接機能していた。

前にくる語彙の開母音「a」「e」「o」に後接する「イ」助詞の働きをみるのに「朝イ」(11.8%)・「車イ」(9.0%)・「梅イ」(10.9%)・「右手イ」(7.2%)・「リンゴイ」(6.3%)と、衰滅してゆく助詞とはいいいながらも全体的にみてまだ

だ使用度が高い。

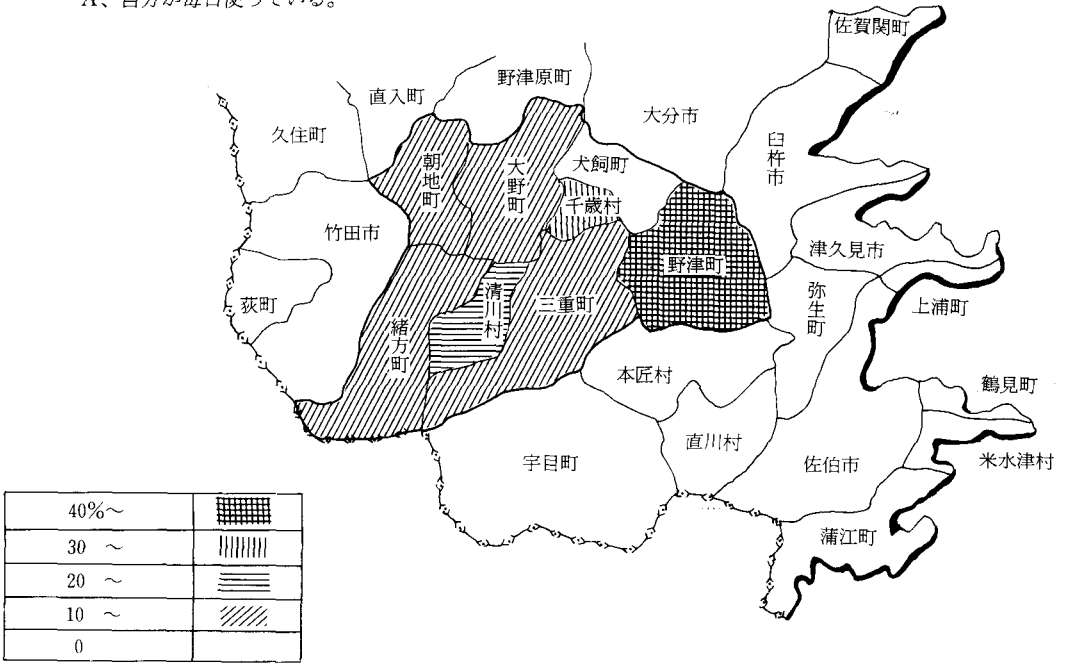
なお「u+イ」の場合も「ようすイ」(2.7%)「鶴イ」(0.9%)と「イ」助詞の後接度合は低いままに、まだ息づいていることは前回と同じである。

が、ただ「i+イ」になると、「火イ」(1.8%)「柿イ」(0.9%)といった例があがっているが、「胃イ」とは全くいわないようである。「i+イ」の形の言語活動はまさに消滅寸前といった感じが強い。

「n+イ」の使用例は今回も全くみあたらない。前回の調査結果と同じ結果であった。

ついでに、学年別に「イ」助詞の使用状況を見ると、1年生の使用率が26.3パーセントと高く、3年生がつづいて15.4パーセントと低い。一般的な学年の相が覗いているような感じがする。つまり1年生は入学してやっと4ヶ月たったばかりで、小学校からもち込んだ方言がまだまだ生々しいだろうし、3年生は部活等もぼつ

A、自分が毎日使っている。



B、自分は使わないが、他の人は使っている。

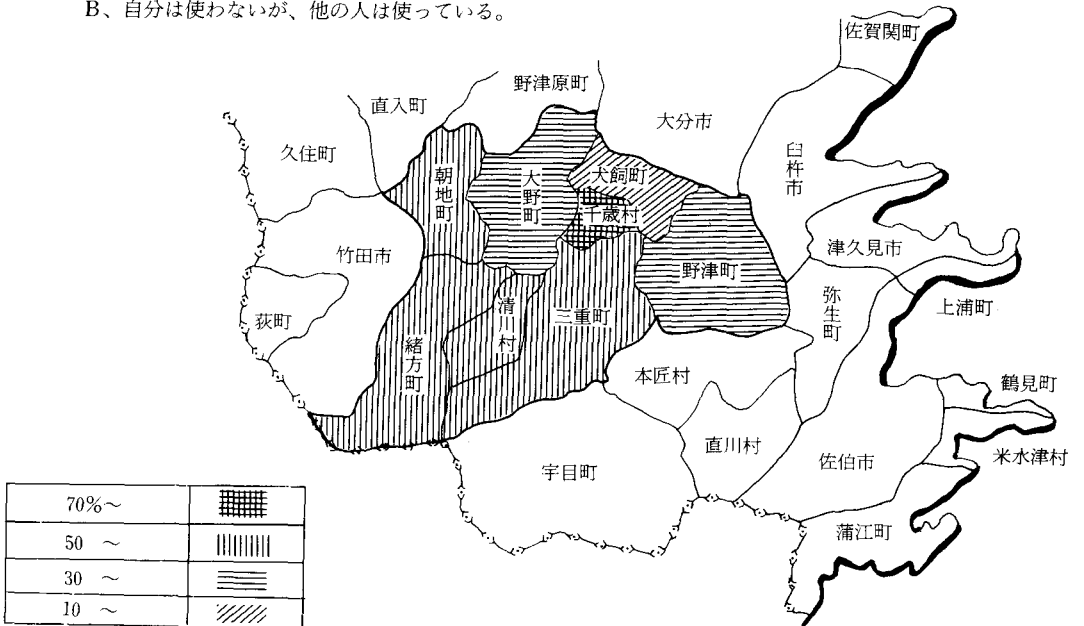


図9 大野郡内「イ」助詞使用状況 (昭和55年9月調査)
対象中学生

表12 大野川流域イ助詞使用状況(中学校別)

母音 符号	内容	数字は人数・()は%													(昭和55年9月調査)				
		緑ヶ丘	祖峰	南生	竹田	朝地	緒方	米山	清川	大野	千歳	三重	重岡	小野市	野津	犬飼	戸次	鶴崎	計
a	1 朝が			1 (4.3)			3 (7.7)		5 (13.5)			8 (20.0)		7 (17.5)	3 (7.7)	10 (27.7)			37 (5.9)
	2 車が			1 (4.3)				9 (24.3)			3 (7.5)		3 (7.5)	1 (2.6)	8 (22.2)			26 (4.2)	
	3 「あ」が																		
e	4 右手が			1 (4.3)				5 (13.5)			6 (15.0)		2 (5.0)		10 (27.7)			24 (3.8)	
	5 手が									1 (2.5)		5 (12.5)					6 (9.8)		
	6 梅が			1 (4.3)		6 (17.6)	1 (2.6)	5 (13.5)	1 (2.6)	8 (20.0)		2 (5.0)	1 (2.6)	12 (33.3)			37 (5.9)		
o	7 リンゴが			1 (4.3)				3 (8.1)			4 (10.0)		3 (7.5)	2 (5.2)	6 (16.6)			21 (3.4)	
	8 色が			1 (4.3)				1 (2.7)		4 (10.0)		2 (5.0)	2 (5.2)	6 (16.6)			16 (2.6)		
	9 緒が			1 (4.3)			1 (2.6)			3 (7.5)	1 (2.6)	1 (2.5)	6 (16.6)			13 (2.1)			
u	10 ようずが						1 (2.6)			2 (5.0)		2 (5.0)	7 (19.4)				12 (1.9)		
	11 鶉が											2 (5.0)	1 (2.6)	3 (0.5)					
	12 胃が																		
i	13 柿が			1 (4.3)								1 (2.5)	1 (2.6)	1 (2.2)			11 (1.7)		
	14 火が																		
	15 お盆が																		
n	16 あきかんが											1 <small>カシノヅメ</small>							
	調査人数	男	32 15・17	39 19・20	23 10・13	36 19・17	34 21・13	39 19・20	38 14・24	37 17・20	39 18・21	40 19・21	39 20・19	40 19・21	39 21・18	36 21・15	33 17・16	41 21・20	619 306・313
	学	年	3	3	3	2	1	2	2	3	3	3	2	1	2	2	2	1	

(1年114・2年293・3年212)

表13 「イ」助詞の使用推移 (中学生対象)

母音 撥発	番号	内 容	音 節	昭27.7~8 現在 196人中 (%)	昭55.8~9 現在 619人中 (%)	一年間の 減少率
a	1	朝 が	a sa 2	163 (83.2)	37 (5.9)	2.76
	2	車 が	ku ru ma 3	139 (70.9)	26 (4.2)	2.38
	3	「あ」 が	a 1	25 (12.7)	0	0
e	4	右手 が	mi gi te 3	95 (48.5)	24 (3.8)	1.59
	5	手 が	te 1	5 (2.5)	6 (0.9)	
	6	梅 が	u me 2	138 (70.4)	37 (5.9)	2.30
o	7	リンゴ が	ri n go 3	141 (71.9)	21 (3.4)	2.45
	8	色 が	i ro 2	145 (73.9)	16 (2.5)	2.55
	9	緒 が	o 1	56 (28.5)	13 (2.1)	0.94
u	10	ようす が	yo o su 3	115 (58.6)	12 (1.9)	2.02
	11	鶉(う) が	u 1	29 (14.7)	3 (0.4)	0.51
i	12	胃 が	i 1	0	0	0
	13	柿 が	ka ki 2	9 (4.5)	11 (1.7)	0.1
	14	火 が	hi 1	4 (2.0)	0	0
n	15	お盆 が	o bo n 3	0	0	0
	16	あきかんが	a ki ka n 4	0	1(0.6)	0

ぼつ2年生にゆずって卒業学年としての仕上げにかかる。言語意識も就職・進学を前に今までとはいささかちがってくるであろう。その中で2年生は、学校の中堅として期待されながらも生活面は得て乱れがちになるという点、言語意識にもひびいているのではなかろうか。〔表14〕が示すようにこの2学年は女子が男子の半分にも満たない学年である。それだけに方言が使われていいように思えるのだが共通語化が特に進展しているとも思えないし、調査者の口の入れ方に大きな差があったとも考えられないので、つまるところ言語意識の低調さに起因しているともみたい。

今度の調査結果できわだっているのは「イ」助詞の使用率が、女子の場合、男子の38.1パーセントに比べて、僅か17.0パーセントと半分にも満たないことである。この数字は、農山村とはいえ、言語感覚・言語意識の面に敏感な女子生徒の共通語に対する反応の鋭さを示しているともみているのではなかろうか。

また被調査者(中学生)全員を清川村行政区域(大字)別にみると、〔表15〕が示すように、「イ」助詞の使用度合は、白尾0%、駅前0%、雨堤0.9%と、低いというよりは殆ど使用されていない。天神(0%)も小学校に近いからか用例がない。一方、小学校の所在地砂田(6.3%)は中学校所在地の三玉(0.9%)に比べてはるかに使用度合が高い。砂田は昔の宿場町、祖母山麓の尾平鉦山からの錫の搬出に伴い栄えた土地である。今は三重町に客足をとられて往時の俵はないが、いまだに「イ」助詞が温存されているようである。宇田枝(7.2%)は中学校の所在地三玉に近いのに「イ」助詞の使用度合が高いのはなぜか、ひとつには旧行政区のからみがある。昭和32年に現清川村が発足したがそれまで三玉地区は旧牧口村に、宇田枝地区は、旧合川村に属し穀倉地帯として繁栄してきた。なおこの両地区は現中学校下を流れる奥嶽川の深い溪谷をもって境をなしている。こういったことが原因しているのではなかろうか。

表14 「イ」助詞の使用状況(中学生対象)

数字は「イ」助詞使用者数を示す。

番号	内容	被調査者数 音節数	1年(35)		2年(31)		3年(44)		計110		総計(%)	
			男 (17)	女 (18)	男 (21)	女 (10)	男 (19)	女 (25)	男 (57)	女 (53)		
1	朝	が	2	3	4	1	1	2	2	6	7	13(11.8)
2	車	が	3	2	2	1	1	3	1	6	4	10(9.0)
3	「あ」	が	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
4	右手	が	3	2	3	1	0	2	0	5	3	8(7.2)
5	手	が	1	2	1	1	0	1	0	4	1	5(4.5)
6	梅	が	2	3	2	2	1	3	1	8	4	12(10.9)
7	リンゴ	が	3	2	1	2	0	1	1	5	2	7(6.3)
8	緒	が	1	2	0	0	0	0	0	2	0	2(1.8)
9	ようす	が	3	2	0	1	0	0	0	3	0	3(2.7)
10	鶴	が	1	1	0	0	0	0	0	1	0	1(0.9)
11	胃	が	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
12	柿	が	2	1	0	0	0	0	0	1	0	1(0.9)
13	火	が	1	1	0	0	1	0	0	1	1	2(1.8)
14	お盆	が	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
15	あきかん	が	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計			21	13	9	4	12	5	男42(38.1)女22(17.0)			
			34(26.3)		13(10.0)		17(15.4)		64(58.1)			

(昭和62年8月調査)

平石(0.9%)は緒方町と、大白谷は三重町とそれぞれ交通の便が開けており、生活圏もそちら向きであるからか、山間部にしては「イ」助詞の使用度合が低い。さきに述べた宇田枝(7.2%)をはじめ左右知(5.4%)、六種(5.4%)、伏野(3.6%)、(伏野は三重線<バス>に沿っている関係から少し使用率が落ちる。)総体的にみて、狭い47.1平方キロメートルの清川村の中にも「イ」助詞の使用に地域差が出ているのには驚く。共通語の進出ぶりを裏付けしている好現象かと思う。

また、「人の使っているのを聞いたことがある」と答えた者が、白尾(6.3%)、雨堤(3.6%)、三玉(5.4%)、をはじめ、全体で47.2パーセント。自分が使う、人が使うを合すると優に81.7パーセントにもなる。清川村では「イ」助詞はまだまだ日常語としての機能を十分みせている

といえそうである。

② 採録調査(対象中学生)

清川村立清川中学校の全校生対象の調査結果は前述のとおりだが、日常の言語活動の実態を生のまま記録するために、次のように採録、調査を実施した。

- 中学生数名を無作為選出。(学校に依頼した結果、男1・女3となる)
- 事前に調査の主旨を説明、4名に協力を乞う。(録音の旨、了承を得る。)
- 放課前の教室を使用。
- 円形に机を並べ、普段のままのことで雑談をしてもらう。

表15 清川村大字別「イ」助詞使用状況（中学生対象）

aは被調査者数、bは「イ」助詞使用者数、cは「イ」助詞使用を聞いたことのある者の数

大字	学年 性別	1 (35)		2 (31)		3 (44)		計 (110)		百分率
		男	女	男	女	男	女	男	女	
砂田	a	2	2	6	2	2	5	10	9	17.2
	b	2	2	2			1	4	3	6.3
	c			4		1	1	5	1	5.4
雨堤	a	3		1	1	1	1	5	2	6.3
	b						1		1	0.9
	c	2		1		1		4		3.6
白尾	a		3	2		2	2	4	5	8.1
	b									0
	c		4	1		1	1	2	5	6.3
駅前	a		1		1				2	1.8
	b									0
	c		1		1				2	1.8
天神	a		1			2		2	1	2.7
	b									0
	c		1			2		2	1	2.7
三玉	a	2	2	2	2		1	4	5	8.1
	b		1						1	0.9
	c		1	2	2		1	2	4	5.4
宇田枝	a	3	2	1	2	3	3	7	7	12.7
	b	2	1	1	1	1	2	4	4	7.2
	c	1	1		1	1	1	2	3	4.5
左右知	a	1	1	1		3		5	1	5.4
	b	1	1	1		3		5	1	5.4
	c									0
平石	a			1			3	1	3	3.6
	b			1				1		0.9
	c					2			2	1.8
六種	a	3	2	1	2	3	2	7	6	11.8
	b	1	1	1	2	1		3	3	5.4
	c		1			2	2	2	3	4.5
伏野	a		4	2		1	4	3	8	10.0
	b		3			1		1	3	3.6
	c			2			3	2	3	4.5
大白谷	a	1		1				2		1.8
	b									0
	c	1		1				2		1.8
無記入	a	2		3		2	4	7	4	10.0
	b	1		1		2		4		3.6
	c	1		1			3	2	3	4.5
計	a	17	18	21	10	19	25	57	53	100
	b	7	9	7	3	8	4	22 (20.0%)	16 (14.5%)	34.5
	c	5	9	12	4	8	14	25 (22.7%)	27 (24.5%)	47.2

(昭和62年8月調査)

清川村行政区域(大字)

面積 47.10km²

人口 997世帯・3,826人(昭和59年12月1日現在・大分県統計課)

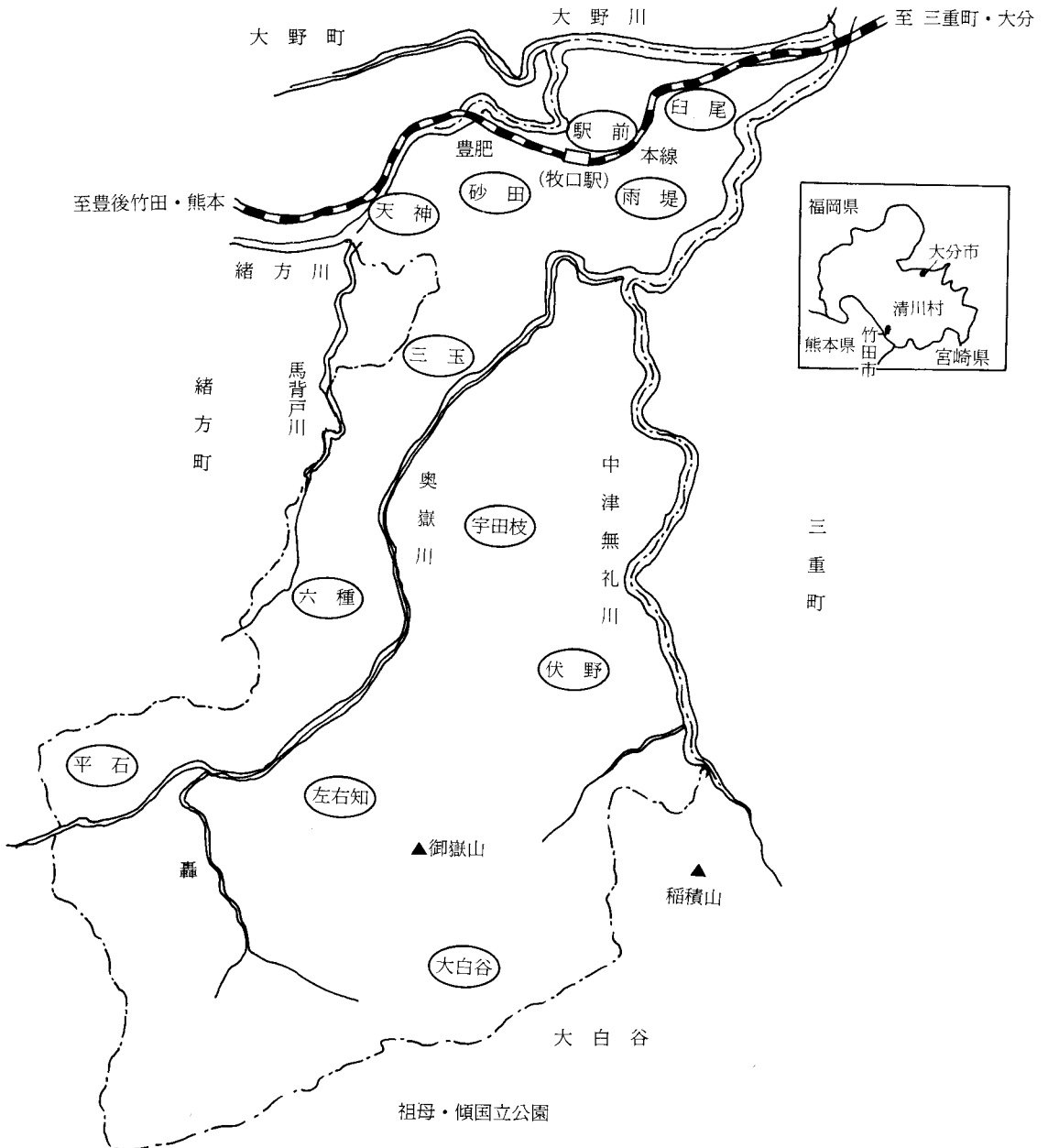


図10 『清川村行政区』(昭和62年現在)

話者 (清川中学校3年生)

- A. 14歳男 大野郡清川村大字左右知字
轟
- B. 14歳女 大野郡清川村大字伏野字伏
野
- C. 15歳女 大野郡清川村大字伏野字内
平
- D. 14歳女 大野郡清川村大字宇田枝字
年神

話者の4名はいずれも清川村生まれの清川育ちである。中学での学業成績は上位にあるという。話題がたまたま「ミズアベ」(泳ぎ)のことに及んだ時の話のやりとりをみよ。

(A1・A2…の数字は回数を示す)

- B₁. セイボン, ナツヤスミノシュクダイスコ
シヤッター。ワタシスコシスダヨ。 (誠坊<本名「誠次」>。夏休みの宿題少しは終わった?私少しはすましたよ)
- A₁. イーノ, チットーデン, オレナンカオ
マエ, ナニガデキューカエ, コレカラジ
ヤ, イママジ, イツモミズアベバッカリ,
イチョウタキ。 (いいなあ少しでも…僕なんかあなた、なにができるか、これからですよ。今まで、いつも泳ぎにばかりいっていたから)。
- C₁. オヨギッテ, ドキーイクンナ, プールジ
ヤネンナ。 (泳ぎってどこに行くの、プールではないのですか。)
- A₂. イーンニヤ, オクダケガワージャ, プー
ルンイーナ。ワカッチョルケンド, カワ
イイエカリチケケン, カワンホーガオ
モシリワイ。 (いいや、奥嶽川ですよ。プールのよいのは、わかっているけれども、川が自宅か

ら近いので、川の方がおもしろいですよ。)

- D₁. フーン, ソンナモンカナ。 (ほう, そんなものですかねえ。)
- A₃. オー, ミズアビュースルトコロニヤキガ
オイージ, カベンヨーニツタツチョン
イワバイアッチ, ソツカリトビクージ
ミイ。ソラモ…。 (うん, 泳ぎをする場所には木が生い茂っていて, 壁のように突き立っている岩場があって, そこから飛び込んでみよ。それはもう……。)
- B₂. ミンナ, トビコムン。 (みんな, 飛び込むのですか。)
- A₄. オー, オトコモ, オナゴモミナ, コンメ
コノホカ, ショーガクセイカリー, モ
ミナ。 (うん, 男も女もみんな, 小さな子供よりほかは, 小学生から, もうみんなが。)
- C₂. デン, タカカロー, ドンクライアンナー,
カワーフカインジャロー。 (でも高いのでしょうか。どの位高いの, 川は深いのでしょうか。)
- A₅. オー, ダンダンニナッチョルンジャー。
タケートカー, 3~4メートルワアルカ
ノ。シタワ, フチジャケンイキガキル
ルグレーモグッテン, トーテンソコニヤ
イキツカセン。 (うん, 段々になっているんだよ。高いところは, 3~4メートルはあるかなあ, 下は渚だから息が切れるぐらいもぐっても, とうてい底には行き着きはしない。)
- A₆. モグッチミルト, ハジメンウチャード
カストアタマンシンガジントシタ
リスルケンドノ, タイシタコターネー。

(もぐってみると、始めのうちは、どうかすると頭のしんが、じいんとしたりするけれどもなあ。たいしたことはない。)

D₂. アメガフツテ, ミズガデタラ, オヨゲンノヤロー。

(雨が降って、水が出たら、泳げないのでしよう。)

A₇. チットーグリーンミズナラ, デタッテンカマワセン。キョーモガッコーイオワツタラ, ミズアビーイクヨーニシチヨル, シンチャンタチト。

(少し位の水なら出たってもかまいはしない。今日も学校が退けたら泳ぎに行くようにしている。真ちゃんたちと。)

B₃. アノーシンイチクンノコト, キノーノアメデカワノナガレガハヤクナツションミタイヤケン, キオツケヨーエ。

(あの真一君のこと。昨日の雨で川の流れが早くなっているみたいだから気をつけなさいよ、ねえ。)

A₈. アリガト, ハヨガッコーイオワランカノニ。ンナラ。

(有難う。早く学校が終らないかねえ、それでは……。)

これは一人の男子中学生が泳ぎについて得得と語るのを、三人の女子中学生(同級生)が囲み、質問や、合いの手を入れながら話を進展させて、いく場面である。

全体的に会話を整理してみると、中心人物Aが8回、Bが2回、Cが2回、Dが3回という発言の組合せになっている。Aの話は相手にことばをさしはさませないほどの流暢さで、一人舞台を演じていく。しかも方言まるだしである。比べて女生徒のことばはやわらかく、共通語への志向が働くのか主格の「イ」助詞は出てこない。

全会話を通して、ガ格(主格)の適当する位置

のことばをぬきだし整理してみると、

A₁の「ナニガ」(何が), A₂の「カワイ」(川が), 「カワンホーガ」(川の方が), A₃の「キガ」(木が), 「イワバイ」(岩場が), A₅の「イキガ」(息が), A₆の「アタマンシंगा」(頭のしんが), D₂「アメガ」(雨が) A₇「ガッコーイ」(学校が), D₃「カワノナガレガ」(川の流れが), A₈「ガッコーイ」(学校が)。

と11箇所でてくる。その中で「イ」助詞が「川イ」「岩場イ」「学校イ」(2回)と4回の36.3パーセント使用されている。これら11箇所の語を「イ」助詞の音韻上の制約に照らしてみると、

① [a + イ]

「kawa イ」(川が), 「iwaba イ」(岩場が)

② [o + イ]

「gakko イ」(学校が) (2例)

③ [o + ガ]

「kawanhoo ガ」(川の方が)

④ [e + ガ]

「nagare ガ」(流れが), 「ame ガ」(雨が)

⑤ [i + ガ]

「nani ガ」(何が), 「iki ガ」(息が), 「ki ガ」(木が)

⑥ [n + ガ]

「atamanshin ガ」(頭のしんが)

と6つの形で現れている。

①②は「イ」助詞は〈a, o, e〉の順に後接しやすいという特徴をそのまま示している。が、③の「kawanhoo ガ」(o + ガ)については、同じA₂の話中に「kawa イ」(a + イ)と「イ」助詞を使っている。普通であったら、調査者の体験からみても「川ン方イ」となりそうだが話者は「イ」と「ガ」とを同一話中に併用している。「イ」助詞から「ガ」助詞への過渡期の姿とみていいのではないか。④は2つともDのことばである。これも普通なら「流れイ」「雨イ」というところだろうが、男生徒とちがって女生徒の共通語への意識の現れが「ガ」を使用させたのであろう。⑤については、往時には[i + イ]の用例も多かったようだが、現在は極くまれにしかみられなく、ほとんどが[i + ガ]である。そのことを示した好例といえよう。⑥の[n +

イ)は全くその例をみない。いつも〔n+ガ〕となる。その例証といえようか。

前回の第二次調査(昭和55年)の結果から推察して、中学生にこれほどまでに「イ」助詞の使用がみられるとは思ひもしなかった。採録途中で気づいたのだがこの男子生徒Aの出生地は、調査者の出生地と同じ清川村の轟地区であった。いわば「イ」助詞の核心地育ちである。

それにしても、女子生徒Dは宇田枝出身である。宇田枝は前述のとおり〔表15〕、「イ」助詞の使用度合の高い地区である、なのに「アメイフル」とはいわずに「アメガ」と使用している点、ここにまた「イ」助詞から「ガ」助詞への過渡期の様相をみる思いがする。

(2) 臨地調査 (一般人対象)

清川村の轟地区は「イ」助詞使用の核心的地区だと前述したが、当地区居住の一般成人の場合をあげてみる。

お盆で、お参りかたがた調査者が訪ねた家での対話である。Aさん宅に用事があってきていたBさんとAさんのやりとりで、ちょうど夕立のくる前であった。Bさんは戦前若い頃ちょっと教員生活を送ったことがあるという。(A₁、A₂の数字は会話の回数を示す。)

A. 58歳男 大野郡清川村大字左右字轟

B. 65歳女 大野郡清川村大字左右字轟

A₁. アルミヨ、アゲンオーケナクロクモイ
ジェチャーキタワ。キョーコスヒトアメク
ルカモシレンド。

(あれをみて、あんな大きな黒雲が出て来たよ。今日こそ、ひと雨くるかも知れませんぞ。)

B₁. アー、ホントージャ、ユーダチガクルト
イーナー。キノームトートーフリキラン
ジャツガ。ミナー、イモンツルガカレ
カケチョルゲンドナー。

(あらっ、ほんとうだ、夕立がくるといいがねえ。昨日もとうとう降り得なかった

が、みなさい、芋のつるが枯れかけているがねえ。)

A₂. クモン、ウゴキガアゲーハエーワ、ミチ
ヨッチミヨ、キョーワフルド。

(雲の動きが、あんなに早いよ、みてごらん、今日は降るよ。)

B₂. クモイ、ハゲシューナッター。フリヤ
ー、ヒサシブリジャガ、カミナリヤーキ
モチガワリーケンド、ユーダチンアトイ
イー、スイシーキナー。

(雲あしが早くなったねえ。降れば久しぶりだが、雷は気持ちが悪いけれど、夕立の後がいい、涼しいからねえ。)

B₃. アーソージャ、イシージーイナニヤ、ワ
スルルトコジャツタ。

(ああそうだ、急いで帰らないと忘れるところでありました。)

A₃. ドーシタンカ、ヒヨクット。

(どうしたのですか、急に。)

B₄. ホシモヌーシチャルンジャ、エンニ、フ
トンヤラ、クツヤラ、クツガヌルンナー
カンマンケンド、フトンガヌレチミナー
オーゴッデ。

(干し物をしてあるのです。縁に、ふとんやら、靴やら、靴がぬれるのはかまわなけれど、ふとんがぬれてごらん、大へんですよ。)

A₄. オマエーイ、イナンジェン、ダレカイイ
レチクルルワン。オヤカタードキーイタ
ンナー。

(あなたが帰らなくても誰かが取り入れてくれますよ。ご主人はどこに行ったのですか。)

B₅. オヤカターオマエ、ゲートボールンシト
アサハヨー、コーミンカンニイタキー、

ダレムオラン。コドモシャー、ヤキーニ
ヤタタンキナー。

(主人はあなた、ゲートボールの人たちと
朝早く、公民館に行ったので誰もいません。
子供は役にはたちませんからねえ。)

A₅. アーソレジー、ケサ、シモンオミヤンマ
イー、マイクロバスガトマツチョツタン
ジャナ。

(ああ、それで今朝、下のお宮の前に、マ
イクロバスがとまっていたのだね。)

A₆. ココムラン、トシヨリヤー、ナンニン
グレーオルカナー。

(この地区の老人は何人位いますかね
え。)

B₆. ジューヨニンナオルデ。

(14人はいますよ。)

A₇. ヘソツゲーエ、トシヨリタノシミジャ
ナー、ゲートボーリヤー。アーソージャ、
カサイイーナ、カップイイーナ。ドッチ
ジェン。

(へえっ、そんなに。老人の楽しみだねえ、
ゲートボールは。ああそうだ、傘がいい
ですか、合羽がいいですか。どちらでも。)

B₇. イランイラン、チケーンジャキー、ツ
ジイヌル。ジェン、カローカ、カサイ
イー。カソーカシチクレナー。

(いりません、いりません、近いのだから
走って帰ります。でも借りますよか傘
がよい。傘をかして下さい。)

A₈. クローナッチキタナー。カジェイフキジ
エータ、アリユーミナ、タケイゴキジ
エータワ。

(暗くなってきたねえ、風が吹き出した。
あれをごらん、竹がさわぎでしたです
よ。)

B₈. フンナリー、ツージイヌルキー、カサー
モーイーデ。

(それではね、走って帰りますから、傘は
もう結構ですよ。)

A₉. マエンヤマイ、ミエゴツナツタ、ウ
ーキタキタ、タイヘンナユダチ。

(前の山が、見えなくなった。うあつ、す
ごい夕立。)

A₁₀. ホシモナー、イレタカノー。

(干し物は間にあつたかなあ。)

この対話は、A(男)が10回、B(女)が8回
の話を大体交互にかわすことによって展開され
ていく。例によって全体的に、ガ格(主格)の助
詞を必要とする部分のことはをぬきだし、男女
の「イ」助詞使用の状況をみていく。

A(男)の場合

- A 1. ○クロクモイ (黒雲が)
A 2. ○ウゴキガ (動きが)
A 4. ○オマエーイ (あなたが)
○ダレカイ (誰かが)
A 5. ○バスガ (バスが)
A 7. ○カサイ (傘 が)
○カップイ (合羽が)
A 8. ○カジェイ (風 が)
○タケイ (竹 が)
A 9. ○ヤマイ (山 が)

B(女)の場合

- B 1. ○ユダチガ (夕立が)
○イモンツルガ (いものつるが)
B 2. ○クモイ (雲 が)
○キモチガ (気持ちか)
○アトイ (後 が)
B 4. ○クツガ (靴 が)
○フトンガ (ふとんが)
B 7. ○カサイ (傘 が)

このように主格助詞「ガ」に相当する位置が

18箇所みられる。その中で、A(男)は10箇所、B(女)は8箇所、Aの場合「イ」助詞と「ガ」助詞の使用状況は8:2で断然「イ」助詞が多い。比べてBの場合、逆に「ガ」助詞が多く5:3の割合で現われてくる。両者ひっくるめると「イ」助詞の使用率は61パーセント。「ガ」助詞の使用は、38.9パーセントである。大まかにみて6:4の割合で「イ」助詞が使われているといえる。が、よくよくみると、A₂の〔ugokiga〕(動きが)は〔i+イ〕の形にはなりにくく〔i+ガ〕の形が通例である。また、A₅の「マイクロバスが」も〔basu+ガ〕で〔u+イ〕が考えられるが、この場合は「マイクロバスが」という外来語である。外来語の場合には、おおむね「イ」助詞は附かず「ガ」が付き、改まった感じをもたせる。一方B₁の「ユーダチガ」、B₂の「キモチガ」はともに〔yuudachi+ガ〕〔kimo-chi+ガ〕で〔i+イ〕とはなりにくいところから〔i+ガ〕となってくる。いわば正常な形、B₁の「イモンツルガ」「クツガ」は〔imontsuru+ガ〕〔kutsu+ガ〕で〔u+イ〕となってもおかしくはないが共通語の浸透の強い場合には、〔u+ガ〕への傾向が一般的のようである。なお〔フトンガ〕をみると〔huton+ガ〕で〔n+ガ〕の形、これは、〔n+イ〕の用例が全くないところから当然の形であろう。以上ひとつひとつをみてくると、いずれも「イ」助詞の音韻上の制約からみて妥当な使い方である。とすると、この両人はいずれも「イ」助詞本来の機能を十分に活用して言語生活をエンジョイしているとはみられまいか。

いずれも農山村の生活、普段の娯楽はテレビが唯一、老若男女を問わず、共通語化への影響を大なり小なりうけていて、「イ」助詞は風前の燈火、消滅寸前の感が強いとはいえ、一面根強い生命力をもち、残存するところには残存していくんだというたくましさを感じさせている。

IV. 「イ」助詞についてのまとめ

これまでの第一次(昭和27年)・第二次(昭和55年)・第三次(昭和62年)の調査を通して得られた

「イ」助詞についての、いささかな知見を整理するとおおよ次のようになる。

1. まず共時的調査の上からみた場合、「イ」助詞は、大分県大野郡を中心にその隣接町村、大分郡、北海部郡、南海部郡、直入郡、つまり大分県の南半分に集中、その機能を発揮していたが、最近(第二次調査後)は、大分郡、北海部郡、直入郡の一部からその姿を消してきている。通時的にみれば、三ヶ尻浩のいわれたように大分郡、北海部郡、大野郡の山間部が主であったのかも知れない。この三郡が非常に関係の深かったことは、次の調査語彙においてもみられる。例えば清杉繁(梶川・現佐伯豊南高校教諭)の研究「たけのこ笠」(昭和27年)の分布図をみても肯けると思うが、三郡は「バツチロガサ」「バツチヨロガサ」で一地帯を作っているのである。

この「イ」助詞が山間部のものであることは、現実をみれば納得がいく。(図4)

2. 「イ」助詞はだんだんその生命力を失いつつある。現に「イ」助詞の中心舞台である大野郡においても郡の門戸である犬飼町では全くといっていいくらい「イ」助詞が消え「ガ」助詞が使用されている。大野郡の中でも「イ」助詞の核心地と目されている清川村さえ、大字によって「イ」助詞の使用に大きく差がでている。

隣接の旧大分郡吉野村(現大分市)や旧大野郡今市村(現野津原町)は早くも消滅している。(表12)

3. 次に地勢的にみれば「イ」助詞は大野川周辺、山間部の生活語だといえよう。昔は大野川下流周辺まで「イ」助詞はあったが、市の発達、交通の便、それにテレビ等の普及も加わって「ガ」助詞が「イ」助詞にかわりつつある。

一口に言えば、「イ」助詞の中心地、大野郡は盆地、竹田市はもちろん、他の町村いずれも、大野川またはその支流に沿い境はおおむね山でさえぎられているといった地勢である。最近でこそ町村が開けてきたが、今までは町があるにしても何れもが交通不便であった。「イ」助詞の

生命がこの地理的条件に左右されてきたことは否めないであろう。〔図5〕

4. 現行「イ」助詞のよく使われている地域を昔にさかのぼってみると、まず岡領・中川侯の岡藩にたどりつくようである。小藩分立の豊後の国、一般的に閉鎖性の強かったという藩政というものも「イ」助詞を温存する結果の一つになったとは考えられまいか。〔図6〕

5. 「イ」助詞の性格

(1) 「イ」助詞は主格を示す助詞・主格助詞「ガ」と同じもの。

(2) 次のA・B・C・Dの4つの場合に「イ」助詞は後接する。

A. 名 詞 (例) ○カワイアル(川がある。)

(例) ○アメイフル(雨が降る。)

B. 代 名 詞 (例) ○ソコイソーじゃ(そこがそうだ)

○オレイシユ(俺がしよう)

C. 形式名詞 (例) ○ソンコトイキニナル(そのことが気にかかる)

○ソゲースルトコイキニイツタ(そのようにするところが気にいった)

D. 準体助詞 (例) ○コンノイワリーンジャ(こないのがわるいのだ)

○クーノイイー(食べるのがいい)

(3) 山田孝雄『奈良文法史』にいう係助詞「は」「し」を伴うことは「イ」助詞にはない。(「し」は間投助詞ではないかと調査者は思うが)

次のような場合には「イ」が後接する。

○サエ, 「サエイ」(…さえが)

○ダケ, 「ダケイ」(…だけが)

○ホド, 「ホドイ」(…ほどが)

○ナド, 「ナドイ」(…などが)

○マデ, 「マデイ」(…までが)

○ヤラ, 「ヤライ」(…やらが)

○ダノ, 「ダノイ」(…だのが)

○ツツ, 「ツツイ」(…つつが)

○ナガラ, 「ナガライ」(ながらが)

と副助詞及び接続助詞の一部にも後接する。が「イ」助詞のあとに他の助詞のつづく例はみられないようである。

(4) 音韻上の制約

① 2音節以上で、a, o, e, で終る語には「イ」が後接しやすい。

② [u]音で終る語の場合は、「イ」が後接する場合とそうでない場合がある。

③ [i]音で終る語には「イ」はほとんどの場合後接しにくい。だが後接する場合もある。

④ [n]音で終る語には「イ」は全く後接しない。いつも「ガ」がつづく。

⑤ [u]・[i]で終る語に「イ」が後接したり、しなかったりする現象から察して、往時は、何れにも「イ」がかんたんに後接していたのではないか。

⑥ 「グ」は「ガ」の変形かと思われるが「イ」は「グ」「ガ」とは別個のものであり、在来的に歴史の古いものと思われる。

6. 「イ」助詞の使用推移 (対象中学生)

第一次・第二次・第三次の調査結果から「イ」助詞の使用状況を大野郡内の中学生を対象に比較してみる。〔表16〕・例を「朝が、来た」ととってみた場合昭和27年7月調査では83.2パーセントの使用率がみられたのが約30年後の昭和55年には僅かに5.9パーセントに、もうなくなるのではと思われたのが、昭和62年の調査では、55年の2倍の使用率となってあらわれた。なぜか、理由の最大なものは、

① 被調査者が清川中学1校の生徒であ

表16 イ助詞の使用推移 (中学生対象)

母音 撥音	番号	内 容	音 節	昭・27・7調査 196人中 (%)	昭・55・9調査 619人中 (%)	昭・62・8調査 110人中 (%)	
a	1	朝 が	a sa	2	163 (83.2)	37 (5.9)	13 (11.8)
	2	車 が	ku ru ma	3	139 (70.9)	26 (4.2)	10 (9.0)
	3	「あ」 が	a	1	25 (12.7)	0	0
e	4	右手 が	mi gi te	3	95 (48.5)	24 (3.8)	8 (7.2)
	5	手 が	te	1	5 (2.5)	6 (9.8)	5 (4.5)
	6	梅 が	u me	2	138 (70.4)	37 (5.9)	12 (10.9)
o	7	リンゴ が	ri n go	3	141 (71.9)	21 (3.4)	7 (6.3)
	8	緒 が	o	1	56 (28.5)	13 (2.1)	2 (1.8)
u	9	ようす が	yo o su	2	115 (58.6)	12 (1.9)	3 (2.7)
	10	鶉 が	u	1	29 (14.7)	3 (0.4)	1 (0.9)
i	11	胃 が	i	1	0	0	0
	12	柿 が	ka ki	2	9 (4.5)	11 (1.7)	1 (0.9)
	13	火 が	hi	1	4 (2.0)	0	2 (1.8)
n	14	お盆 が	o bo n	3	0	0	0
	15	あきかんが	a ki ka n	4	0	0	0

る。

② 清川村は大野郡内でも「イ」助詞の使用度の高い方の地区である〔図8〕

③ 清川村の人口推移をみるのに、

昭和30年 6170人

昭和60年 3117人

と30年間に半分に減っている、それだけ土着の人とか老年者が比重を占め居残っていると思われる。

このことは在来の言語生活がよく受け継がれていることになり「イ」助詞もその一つに考えられようから。

④ 被調査者数が少なかった関係で調査の趣旨がゆきとどいた向きがある。

と、いった条件の差が、〔表16〕に出てきたのだと思う。

消滅しそうで消滅しない「イ」助詞である。

V. お わ り に

調査者にとっての故郷は「イ」助詞である。

「イ」助詞は年々減少していっくだろう。この急速に進展していく社会情勢の中では10年毎といわずに小刻みに「イ」助詞の調査を進めていく必要を感じている。

またそれと併行して「イ」助詞の機能を文献等から探り、その実態をより明らかにしていきたいと考えている。

参 考 文 献

- | | |
|-------------|------------|
| 大分県方言の研究 | 三ヶ尻 浩 |
| 豊後浄瑠璃 | 三ヶ尻 浩 |
| 大分方言考 | 堀江 与一 |
| 大分方言類集 | 土肥健之助 |
| 大分県方言の旅(3巻) | NHK 大分放送局編 |
| 大分方言 | 糸井 寛一 |
| 「イ」助詞聴説 | 糸井 寛一 |
| 主格のイ助詞について | 糸井 寛一 |
| 会誌「チヨルケン」 | 大分大学方言研究会 |
| 方言生活の実態 | 松田 正義 |
| 九州地方の方言 | 飯豊 毅一他 |
| 方言学 | 東条 操 |
| 奈良朝文法史 | 山田 孝雄 |

全国方言辞典	平山 輝男	語彙論の方法	柴田 武
古代語新論	奥里 将建	方言論	柴田 武
方言と標準語	大石初太郎他	日本の方言	柴田 武
国語助詞の研究	此島 正年	万葉集	日本古典文学全集
方言学	藤原 与一		小学館
方言学の方法	藤原 与一	日本地名大辞典	角川書店
日本語方言文法の研究	藤原 与一	大分県万能地図	大分合同新聞社
方言の山野	藤原 与一	ふるさと選集	大分県観光協会
日本語	金田一春彦	大野川	大分大学教育学部編
日本の方言地図	徳川 宗賢	三重町誌	大野郡三重町
文法と語彙	大野 晋	清川村誌	大野郡清川村
日本語の起源	大野 晋		